

ISSN 0388-0176

# 中・四国 アメリカ文学研究

第47号

2011年6月

中・四国アメリカ文学会

# 中・四国 アメリカ文学研究

*Chu-Shikoku*

*Studies in American Literature*

No. 47

June 2011

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society



## 目 次

### 論文

- 『村』におけるスノープリズムの精神解剖学  
——フォークナーの喜劇的「資本主義」批判——  
.....赤 山 幸太郎 1
- ハインラインの『ガニメデの少年』におけるスカウト活動の意味と  
アメリカン・ヒーロー像の危機  
..... 島 克 也 13

### 第39回大会シンポジウム報告

- E.A.Poe、語り継がれる名作—「モルグ街の殺人事件」  
.....伊 藤 詔 子、辻 和 彦 23  
小 森 健太朗、元 山 千 歳  
林 康 次

### 書評

- 欧米言語文化学会 編  
『実像への挑戦——英米文学研究』  
.....藤 江 啓 子 48
- 前田一平 著  
『若きヘミングウェイ—生と性の模索』  
.....本 荘 忠 大 51
- 田中久男 監修 亀井俊介・平石貴樹 編著  
『アメリカ文学のニュー・フロンティア』  
..... 林 康 次 54

# CONTENTS

## Articles

Psychoanatomy of Snopesism in *The Hamlet*:

Faulkner's Critique of Capitalism through the Lens of Comedy

..... AKAYAMA Kohtarō 1

Robert Heinlein's *Farmer in the Sky*:

Traditional American Heroes Displaced by Boy Scouts

..... SHIMA Katsuya 13

## Report of Symposium at the 39th Conference

On Edgar Allan Poe's Super-Masterpiece, "The Murders in the Rue Morgue"

..... ITOH Shoko, TSUJI Kazuhiko 23

..... KOMORI Kentarō, MOTOYAMA Chitoshi

..... HAYASHI Koji

## Book Reviews

..... FUJIE Keiko, HONJO Tadahiro 48

..... HAYASHI Koji

## 『村』におけるスノープシズムの精神解剖学 ——フォークナーの喜劇的「資本主義」批判——

赤山 幸太郎

### 序.

スノープス三部作の第一作『村』(*The Hamlet*, 1940)の主人公フレム・スノープス(Flem Snopes)は、「金儲けを存在の究極目的だと信じる」(FU 108-9)拜金主義的な生き方、いわゆるスノープシズム(Snopesism)の体現者である。批評家達は、フレムを「資本主義の代理人」(Gray 254)、「伝統的で温情主義的な南部経済に取って代わる、近代的で非人間的な資本主義」(Froehlich 234)、「新南部の資本主義者」(Skinfill 166)などとして批判してきた。しかしフォークナー(William Faulkner)が、白痴のアイク・スノープス(Ike Snopes)と雌牛の「愛」をめぐる挿話および他の「交換」をめぐる挿話群を通じて、フレムの拜金主義的な資本主義(スノープシズム)を喜劇的に批判していることは指摘されていない。また、アイクと雌牛の挿話が、物神としての貨幣に対する欲望発生のメカニズムを精神解剖学的に解明する企てである点も注目されていない。そこで本稿では、これらの挿話群を通じて、フォークナーが①〈愛〉の不可能性と欲望の起源、②物神崇拜<sup>フェティシズム</sup>、③剰余価値の創出といった諸問題を分析し、それによってフレムの体現する「資本主義」を根源的に批判するための新たな戦略を提起していることを示したい。このような考察は、南部旧家没落の「悲劇」を書き継いできたフォークナーが、『村』に至って突如「喜劇」的転回を見せた謎をも、読解の射程に収めることになる。

### I. 〈愛〉の不可能性と欲望の起源：〈もの〉の殺害としての雌牛の殺害

『村』は、19世紀末から20世紀初頭のフレンチマンズ・バンド(Frenchman's Bend)というアメリカ南部の「村」を舞台に、貧乏白人のフレム・スノープスが、村最大の権力者ウィル・ヴァーナー(Will Varner)の娘ユーラ(Eula)を妻として手に入れ、資本主義化する南部社会の新興勢力となって下層階級から上層階級へと這い上がっていく様を描き出している。ユーラは、過剰な性的魅力と自然の豊穡さを湛えた神話的な女性原理の体現者として描かれるが、利潤追求にのみ専心する資本主義機械のようなフレムとの「結婚」の後、テキスト上からほぼ姿を消す。その後、彼女が第二作『町』(*The Town*, 1957)に再登場する際には、あらゆる男を虜にする女神さながらの圧倒的な魅力は影を潜め、世間体を気にしつつ、ジェファソン(Jefferson)という「町」の市長で銀行の頭取でもあるマンフレッド・ド・スペイン(Manfred de Spain)との不倫に興じ、また、一人娘リンダ(Linda)のことを心配する世俗的な女性に変身している。ユーラの神話的な崇高性から現世的な低俗性への下降。彼女の豹変に対するフォークナーの説明はない。ユーラ変貌の謎は、架空の南部ヨクナパトーフア郡(Yoknapatawpha County)の資本主義化との関係から読み

解けるのではないか？

この謎を解明する鍵は、白痴のアイク・スノープスと雌牛との愛を描いた挿話に隠されている。概略はこうだ。アイクは夜ごと納屋を抜け出し、小川に水を飲みに来る雌牛との逢瀬を楽しんでいた。しかしアイクの雌牛への愛は、スノープス一族のランスロット (Lancelot) という男の企みで、やがて金儲けのための見世物にされる。更に残酷なことに、白痴との獣姦的な行為をやめさせるために雌牛は殺され、アイクはその肉を食べさせられてしまう。その後、アイクは雌牛の代わりにおもちゃの牛をあてがわれるが、その取り換えに気付かず、アイクが雌牛の代替物である壊れた牛の玩具と幸福そうに戯れ続ける場面で、挿話は終わるのである。

まず、雌牛の殺害および玩具の牛との取り換えの意味を考えてみよう。この問題を考える際に好適なのが、精神分析学者ラカン (Jacques Lacan) の「〈もの〉の殺害」による象徴 (言葉) の獲得と欲望の発生に関する議論である。ラカンは「象徴は、まず〈もの〉の殺害として現れ、〈もの〉の死が主体の欲望を永遠化する」(Écrits 262) と定式化する。ここで〈もの (das Ding)〉とは、フロイト (Sigmund Freud) の概念で、狭義には乳児期における前-言語的な〈母=子〉一体の充足体験の記憶痕跡をさす。フロイト的な図式では、この〈母=子〉の融合状態、いわば原初的な〈愛〉の関係が、「父」の介入によって切断され、失われる。これが「去勢」である。ラカンはこれを、幼児が〈母=子〉の鏡像的な閉域 (「想像界」) から、「父」の支配する言語的秩序 (「象徴界」) へと強制的に疎外される「象徴的去勢」と読み替えた。このようなラカンの認識を、フォークナーは “the words kill [the personal experience]” (ESPL 187) と表現し、共有する。了解可能な一般性しか表象し得ない「言葉」は、他者には了解不可能な「個人的な体験」を表現した瞬間に、個人的な体験や存在の唯一=特異性を「殺して」しまうのだ。この言語的な去勢機能によって殺害される存在の核こそが、広義の〈もの〉にほかならない。幼児は「象徴界」への参入に際して「象徴 (言葉)」と引き替えに、原初的な〈愛〉であり、自らの存在の核でもある〈もの〉を失う。この根源的な喪失が「欲望」を生み出すのだ。殺害された〈もの〉は、「象徴化から排除された〈現実界〉」(Écrits 324) という到達不可能な〈外部〉へと失われ、存在欠如を抱え込んだ空虚な主体 (ラカンの言う「斜線を引かれた主体」) は、回復不可能な〈もの〉を永遠に「欲望」し続ける運命を担わされることになるのである。

以上の予備的考察を念頭に置いて、アイクと雌牛の物語を精神的に読み解いてみよう。まず、アイクの白痴という設定は、彼が言葉を喋れない者、つまり「infant (= 幼児)」であることを意味している。大きな乳房をもち幼児アイクにミルクを与える雌牛は、もちろん「母」である。この幼児と母の幸福な一体感、更に言えば、性的一体化 (テキスト中では獣姦という形で現象するが、一般的には近親相姦) は、家族関係を基盤とする共同体秩序に混乱をもたらす禁忌であるため、文化的禁止 (ラカンの言う「父の否」) が発動される。この「父」の介入によって、原初的な〈愛〉、つまり〈母=子〉一体の近親相姦的な享樂は禁じられ、雌牛とアイクは引き裂かれる。これが「去勢」である。母たる雌牛が殺害され、幼児たるアイクがそれを食べさせられる事態は、〈もの〉の殺害とその強制的受容を意味している。その代償として、アイクは雌牛の「象徴的代替物」である玩具の牛を手に入れ、共同体に受け容れられるが、これは幼児が〈もの〉の殺害の代償として「象徴」を獲得し、「象徴界」に参入することを暗示していると読めるだろう。このアイクと雌牛の恋愛が「フレムとユーラの結婚のパロディになっている」(Towner 53) という前

提に立って、以後、二つの物語を重ね合わせながら読解を進めていこう。

## Ⅱ. 「価値形態論」<sup>フェティシズム</sup>と物神崇拜<sup>フェティシズム</sup>の構造分析

アイクと雌牛の挿話によってフォークナーが提示するのは、マルクス (Karl Marx) が『資本論』(Capital) の冒頭で示した「価値形態論」とも通底する物神崇拜<sup>フェティシズム</sup>の構造分析である。マルクスは「20 エレの亜麻布＝一着の上着」という単純な形態の内に、貨幣形態をその完成型とする「価値形態」の秘密を見出した。商品同士の直接的交換 (物々交換) とは、互いが互いを自らの価値を映し出す鏡にしようとする闘争状態である。この闘争が複数化し全面化した後の商品世界の混沌に、いかにして秩序をもたらすか？無秩序な商品世界からある一商品をスケープゴートとして「排除」し、その一商品を共通の鏡 (尺度) として、各商品の価値を定めればよい。その特殊な一商品が「貨幣」であり、ここに貨幣を超越的な中心 (神) とする商品世界の秩序が形成される。以上が「価値形態論」の要約である。ここで重要なのは「媒介」の契機だ。「20 エレの亜麻布＝一着の上着」という直接的な二項関係は禁止され、両商品の価値関係を表すためには「貨幣」という一般的な等価物を「媒介」するよう要請される。この構造は、アイクが雌牛と〈母＝子〉の直接的な二者関係をもつことを禁じられ、殺された雌牛と関係をもつためには、おもちゃの牛という象徴的等価物を「媒介」にするのと構造的に同型である。この「媒介物」は、単なる「物」であるが、同時に、永遠に失われた〈もの (das Ding)〉への直接的な到達可能性 (つまり原初的な〈愛〉の回復可能性) の幻想を纏うことによって、「物神」<sup>フェティッシュ</sup>となる。

「物神崇拜」<sup>フェティシズム</sup>とは、その命名者シャルル・ド・ブロス (Charles de Brosses) によれば、「物」をそのまま「神」として崇拜する原始宗教の一形態である。そこでは特定の対象が実際の対象以上の価値を帯び、絶対化され崇拜される。この物神<sup>フェティッシュ</sup>について、フロイトは「男児があると信じ、かつ断念しようとしないう母のペニスの代理物」(152-3) と定義した。要するに、精神分析的には物神崇拜とは「去勢」、すなわち〈もの〉の殺害<sup>フェティッシュ</sup>の否認に由来するのだ。例えばアイクの場合、雌牛の殺害を否認した結果、玩具の牛が失われた雌牛の存在価値を帯び、彼にとってかけがえのない物神となる。物神崇拜について、ラカンが「愛の対象 [= 物神]<sup>フェティッシュ</sup>において愛されているのは、その向こう側にある何ものである」(『対象関係』197) と指摘するように、玩具の牛という物神<sup>フェティッシュ</sup>においてアイクに愛されているのは、玩具の牛という「物」の向こう側にある、殺された雌牛という失われた〈もの〉なのである。満足そうに牛の玩具と戯れ続けるアイクは、欲望の原因 (失われた〈もの〉) をそのまま欲望の対象 (具体的な「物」) に短絡させ、欲望の原因＝対象たる物神<sup>フェティッシュ</sup>から部分的な満足を得る物神崇拜者<sup>フェティシスト</sup>にはかならない。

このようなアイクの分析は、フレムの貨幣の物神崇拜<sup>フェティシズム</sup>を説明する。フレムは第一作の『村』で「5 セント硬貨を味がなくなるまで噛む」(H26) 姿で登場し、第二作『町』では、語り手のひとりが「金さ。金以外の何をフレムが欲しがって言うんだい？」(T152) と証言する。そして第三作『館』(The Mansion, 1959) の葬儀の場面に至っては、「貨幣にのみ属していた」(M419) と人生を総括される。かようにフレムは貨幣への欲望に取り憑かれている。では、貨幣の物神崇拜<sup>フェティシズム</sup>とは何か？マルクスによれば、物神崇拜とは関係性から生じたはずの〈価値〉が、まるで初めから「物」に備わっていた属性であるかのように現れる事態をさす。アイクが殺された雌牛との関



係性から生じたはずの〈価値〉を、あたかも玩具の牛それ自体の属性として見るように、フレムは貨幣の〈価値〉をそれ自体の属性と見做す。この「取り違え」は、以下のようにして生じる。「20エレの亜麻布＝一着の上着」という単純形態は、一着の上着という「物」が、同時に20エレの亜麻布との直接的交換可能性（〈価値〉）をもつことを表している。しかるに貨幣形態において貨幣は、商品世界全体から「排除」されることによって「全ての商品＝貨幣」の位置を占め、一般的等価物として全ての商品との直接的交換可能性（〈価値〉）を担わされる。このようにして、貨幣は金属片や紙切れという具体的な「物」であると同時に、あらゆる商品との交換可能性を孕んだ〈価値〉ともなるのだ。この二重性が短絡された結果、単なる経験的な「物」としての貨幣のなかに「神」にも似た超越的な〈価値〉が錯視され、貨幣は「物神」<sup>フエティッシュ</sup>となるのである。

では、何故フレムは貨幣という物神<sup>フエティッシュ</sup>を欲望するのか？ 鋭敏な観察眼をもつ行商人、ラトリフ (Ratliff) が想像するほら話風の挿話にヒントが隠されている。この「ファウスト伝説の改作」(Brooks 171) とも評されるパロディ的な挿話で、フレムは自分の〈魂〉と引き換えに地獄の魔王から地獄を騙し取る。そこで示されるのは、フレムには〈魂〉がないということだ。この〈魂〉の欠如は、精神分析的に言えば、〈もの〉の喪失を意味する。存在の核たる〈もの(魂)〉を失った空虚な主体の欲望は、自らの存在欠如を埋め合わせてくれる代替物<sup>フエティッシュ</sup>＝物神に向かう。そのときフレムは、「貨幣で自分の欲しい物は何でも買える」(T 258) という論理を発見するのだ。マルクスがゲーテ (J.W.Goethe) の『ファウスト』(Faust) のうちに読み取ったように、資本主義の論理は「貨幣という媒介を通じて私のために存在するようになるもの… (すなわち貨幣が買うことのできるもの)、それは貨幣の所有者たる私」(Economic 137) 自身にほかならない、というものだ。貨幣所有者は、自分の存在に欠けているものを、貨幣で買って自らの属性の一部とすることができる。フレムにとって、貨幣は「何でも」、失われた〈もの(魂)〉さえも買うことができるという幻想を与えるがゆえに、欲望の原因＝対象、つまり物神となるのである。主体の存在欠如から生じる〈もの〉への存在論的な欲望を、貨幣という物神<sup>フエティッシュ</sup>への欲望と接合すること。ここに拝金主義的な資本主義 (スノープシズム) 存立の精神的基盤があることを、フォークナーの精神解剖学は見事に暴き出しているのである。

### Ⅲ. 剰余価値の創出：「貨幣の資本への転化」

『村』にはアイクと雌牛の恋愛物語に加え、「交換」をめぐる複数の既発表の短編が、挿話として改作・編入されている。これらの挿話群に対してデボラ・クラーク (Deborah Clarke) は、いずれも同一の商品が異なる所有者の間を移動するだけで、その行為のなかで何も新たに産み出されることがない、と批判している (74)。しかしフォークナーは、故意に「同一物の交換」を反復し、繰り返し形を変えて描き出しているのである。それは資本主義の核心にある「貨幣の資本への転化」、つまり「剰余価値」の創出を搞出するためにほかならない。

マルクスは『資本論』第1巻第2篇第4章「貨幣の資本への転化」のなかで、「100ポンドで買われた綿花が、例えば110ポンドで売られる。この過程の完全な形態は  $M-C-M'$  であり、この  $M'$  は  $M + \Delta M$ 、すなわち最初に投下された貨幣額プラス増加分に等しい」(Capital 251) と述べている。この増加分 (もうけ) が「剰余価値」であり、 $M$  (貨幣) の  $M'$  (剰余価値がプラスされ

た貨幣)への転化が、「貨幣の資本への転化」である。この貨幣の自己増殖過程のなかで、より多くの剰余価値を獲得することが資本の目的であり、その目的に向かって人々の欲望の流れを調整し、駆動していく社会が資本主義社会なのである。フォークナーが描き出した「交換」にまつわるエピソード群は、いずれも貨幣(M)で購入した商品(C)をより高く売る(M')という資本主義的な価値の増殖過程を繰り返し描き出しているのだ。

二つほど例を挙げる。まず、フレムの父、アブ(Ab)が悪辣な馬商人パット・スタンパー(Pat Stamper)に打ち負かされるエピソードから見ていこう。パットはアブから8ドルで買った馬を黒く塗り、皮膚の下にタイヤのチューブを埋め込んで空気を入れ、筋骨隆々の立派な馬に仕立てあげる。そのうえで、その同一の商品を24ドル前後の高値でアブに売りつけ、より多くの貨幣を獲得することに成功する。これは剰余価値の創出過程であり、「貨幣の資本への転化」にほかならない。次に、オールド・フレンチマン屋敷(Old Frenchman Place)売買にまつわる別のエピソードを瞥見してみよう。この買い手もつかぬ無用の廃屋を、私生児を孕んだユーラとの結婚と引き換えにウィルから無料で譲り受けたフレムは、南北戦争時から伝わる埋蔵金の伝説を利用する。「何枚かの銀貨を投資(invest)」(M 142)して、人目につくように埋めておいたのだ。このフレムの販売戦略によって、無価値な古屋敷は「買い手に必要な物神としての交換価値をもつ」(Moreland 133)に至り、この同一の商品を売りつけることによって、フレムはラトリフを始めとする三人の男たちから莫大な利益を巻き上げるのである。

クラークが指摘するように、これらの「同一物の交換」は、確かに生産主義的観点からは何も産み出していないように見える。しかし実はそうではない。そこでは資本主義的な商品交換の過程(M-C-M')のなかで、より多くの剰余価値(もうけ)が産み出されているのだ。それだけではない。次節で見るように、この剰余価値を産み出す資本主義的な交換過程を逆手にとって、フォークナーは喜劇的な笑いの効果をも産み出すことに成功しているのである。

#### IV. 「悲劇」から「喜劇」へ

『村』が、それまでのフォークナーの「悲劇」的な作品群とは調子の異なる「喜劇」的作品であることはしばしば言及されてきた。例えば大橋健三郎は、『村』が「現代における神話性、寓話性を悲劇と言うよりはパトスとヒューモアを秘めた真正の喜劇として定着した」と指摘したうえで、ユーラをフォークナー悲劇の代表作『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929)のキャディ(Caddy)のパロディと見る(346)。パロディであれば、同一性と差異をとともに孕んでいるはずだ。まず、二人の同一性から見ていこう。

ジョン・T・マシューズ(John T. Matthews)によると、ユーラは喪失を刻印された直接的で十全な存在にほかならない(198)。また、カレン・R・サス(Karen R. Saas)は、雌牛とユーラの様々な類似性に着目しつつ、アイクの雌牛に対する欲望および村の男たちのユーラに対する欲望は、〈母なるもの〉に対する欲望に由来すると指摘する(131, 133)。一方、キャディが体現するのは、〈母=子〉一体の「想像界」の〈母〉に対する無意識的な欲望、欠如なき存在に対する欲望であるとドリーン・ファウラー(Doreen Fowler)は喝破する(47)。要するに、ユーラとキャディはともに、〈母なるもの〉として表象される、失われた存在の完全性を喚起する〈もの〉の

特質をもつがゆえに、欲望の原因＝対象となっているのである。〈もの〉は、「象徴界」の中心に開いた〈現実界〉へ通じる穴として、主体の欲望を吸引し続ける。結婚以前のユーラは、常に「中心」(H128, 141, 143, 146)の位置を占め、その周りに彼女の性的魅力に惹き付けられた男たちが「熟した桃に群がる蜂のように集まってくる」(H141)。他方、キャディも「不在の中心」(Fowler 32)あるいは「捕らえ難い欲望の対象」(Bleikasten 60)として、フォークナーおよびクエンティン(Quentin)の語りの欲望を喚起する。この二人の女性は、ともに言語的・貨幣的交換システムの枠組みからはみ出る異物(〈もの〉)として欲望の原因となり、同時に、言語的・経済的交換原理の支配する「象徴界」の外部、つまり〈現実界〉に属する存在として描き出されているのである。

では、二人の間の差異は何か？アレンカ・ジュパンチッチ(Alenka Zupančič)の喜劇論を参照しよう。ジュパンチッチは悲劇と喜劇の違いについて、〈現実界〉の位置付けという観点から考察している。悲劇は〈現実界〉を「内在的かつ接近不可能なものとして(より正確には、〈現実界〉に入っていくことになっている主人公にのみ接近可能なものとして)」(Shortest 171)物語に組み込む。「[T]he South...is dead, killed by the Civil War. There is a thing known whimsically as the New South to be sure, but it is not the south.»(“Introduction” 411)という主張からも窺えるように、フォークナーの悲劇的作品では概して、南北戦争によって殺され、失われた旧南部がこの到達不可能な〈現実界〉の位置を占める。〈母〉なる旧南部は、失われた〈もの〉として、〈現実界〉からフォークナーの語りの欲望を喚起し続けるのである。『響きと怒り』では、失われた旧南部が、キャディという物神フェティッシュに重ね合わされて、フォークナーのペルソナであるクエンティンの欲望を駆り立てる。クエンティンの自殺は表層的には、〈母〉の代替物たる妹キャディとの一体化(近親相姦)を求めた結果である。しかし深層的には、クエンティンはキャディという「物」の向こう側に想定される、失われた旧南部という〈もの〉と直接的に一体化しようとして、至福と同時に死の領域でもある〈現実界〉に飛び込み、悲劇的な自殺を遂げたのである。ここでクエンティンの悲劇が成立するには、彼が抱懐する失われた旧南部という〈現実界〉、内在的かつ接近不可能な〈外部〉が必須である点を押さえておこう。

これに対して、喜劇では「〈現実界〉は同時に超越的かつ接近可能である」(Shortest 171)とジュパンチッチは言う。喜劇の効果は、物神フェティッシュと同様に、超越的な〈もの〉と接近可能な「物」の二重性を短絡させることから生じる。要するに、喜劇が笑いを誘うのは、掴みたいと欲望していた崇高な〈もの〉が、掴んだ瞬間に凡庸な「物」に変わっているからなのだ。<sup>2</sup> 筋骨強壯な名馬のつもりで買った馬は、手に入れた瞬間、空気が抜けて貧弱な瘦馬になってしまう。莫大な埋蔵金の埋まった宝の山のつもりで購入したオールド・フレンチマン屋敷は、手に入れた瞬間、埋蔵金はフレムが埋めた偽物だという真相が発覚し、ただっ広いだけの無価値な古屋敷に変わってしまう。このような喜劇のパターンは、愛する雌牛(〈もの〉)のつもりでアイクが手に入れた牛が、実際には単なる壊れた牛の玩具(「物」)にすぎないという笑話として原型的に提示されていたものにほかならない。このように『村』では、掴もうとした欲望の原因たる〈もの〉が、掴んだ瞬間に平凡な「物」に変わるというパターンが反復され、これが喜劇の効果を生んでいる。そこでは〈もの〉と「物」を媒介する物神フェティッシュが、本質的な役割を果たしているのである。フォークナーの脱構築的な笑いの戦略は明らかだ。それは資本主義の中核にある物神フェティッシュの構造を乗っ取り、それを

そのまま笑いに変えて、資本主義のシステム自体を脱臼させるという喜劇的な戦略にほかならない。女神のような神々しさを放ち、村のすべての男たちの欲望の原因（〈もの〉）であったはずのユーラが、フレムが妻として手に入れた瞬間、ごく普通の女性（「物」）に豹変する謎も、この喜劇的反復のうちにあるのである。

## V. 貨幣的去勢：〈使用価値〉の殺害としてのユーラの結婚

フレムとの結婚を契機として、ユーラは崇高な女神（〈もの〉）から凡庸な女性（「物」）へと変貌する。彼女の変質の意味を、雌牛の運命から読み解いてみよう。ユーラが「雌牛に変身する」（Greet 346）という説は言い過ぎだとしても、両者の類似は明らかだ。ユーラは幾度も雌牛に喩えられ（Gray 263）、逆に、雌牛もユーラと同様、たびたび神話の女神に喩えられる（H 200, 201）。両者は現実から隔絶した存在であり（H 105-6, 206）、自然の豊穰性を孕みながら、聖と性を兼ね備えた〈母なるもの〉として、アイクおよび村の男たちの「〈母なるもの〉と再び一体化したいという欲望」（Saas 129）を刺激するのである。フォークナーは、雌牛とユーラを並行して描き出すことで、読者に読解の方向性を示唆しているように見える。〈もの〉としての雌牛が殺害されたように、〈もの〉としてのユーラも殺害されるのだ、と。この仮説のうえに立って、ユーラという〈もの〉の殺害（=去勢）の意義を探っていこう。

ユーラの去勢は、まず、学校という近代の国家的イデオロギー装置のなかで、“the power of words”（H 117）を介して試みられる。小学生のユーラは、既に成熟した肉体をもち、濃密な性の匂いを発散させて、教室に「混沌」や「墮落」や「争い」をもたらす（H 126-7）。教師のラボーヴ（Labove）は、「言葉の力」を駆使して、ユーラに「秩序と規律」（H 126）を教え込み、彼女を象徴秩序の内部に取り込もうと奮闘する。しかし彼は、欲情に駆られてユーラを強姦しようとし、逆に殴り倒されて学校を去る。言葉の信徒ラボーヴの敗北は、「淫ら極まりないが、同時に神聖不可侵である母体」（H 128）という二項対立を脱構築する前-言語的な〈もの〉の特質をもつユーラを、言語的な象徴秩序の「内部」に取り込めなかったことを意味する。ラボーヴの試みた「言葉の力」による〈もの〉の殺害、すなわちユーラの「象徴的去勢」は、失敗に終わったのである。では、ユーラの去勢はいかにして遂行されるのか？

南部の資本主義化を主題とする『村』において、ユーラの特徴が“that quality in her which absolutely abrogated the exchange value”（H 131）とも規定されている点に注目しよう。フォークナーは敢えて「交換価値」などという用語を使い、これに抵抗する〈もの〉としてユーラを位置付けているのである。フロイト＝ラカンの〈もの〉をマルクスの用語に翻訳すると、「交換価値」に還元されることを拒む〈使用価値〉ということになる。〈使用価値〉とは「交換なしで、つまり、物と人との直接的関係において実現される」（Marx, *Capital* 177）価値、言い換えれば、貨幣的な価値付けに媒介される以前の、存在自体が孕む直接的な価値のことだ。〈使用価値〉とは、資本主義的な等価交換のシステムの内部に取り込まれない異質な外部性（〈もの〉）のことであり、要するに、ユーラは〈使用価値〉として描き出されているのである。

ユーラという〈使用価値〉の去勢は、“the dead power of money”（H 131）によって行われる。「貨幣において商品の一切の質的差異が消失するように、貨幣は根源的＝急進的な平等主義者とし

て、あらゆる差異を消滅させる」(Marx, *Capital* 229)。貨幣は、交換不可能な〈もの〉の唯一＝特異性(質的差異)を殺害・捨棄し、計量可能で交換可能な一般性(量的差異)へと変換することで、貨幣的交換秩序の「内部」に取り込む。そのとき〈もの〉が孕む固有な価値(〈使用価値〉)は、貨幣を尺度とした交換可能な価値(「交換価値」)へと暴力的に還元される。貨幣の行使する同一化・均質化の暴力、いわば「貨幣的去勢」によって、〈もの〉はその唯一＝特異な〈使用価値〉を切り捨てられ、交換可能な「物」(商品)となるのである。フレムは「貨幣の力」を駆使して、〈もの〉としてのユーラを殺害し、「畑」を所有するかの如く彼女を「所有する(own)」(*H* 131)。要するに、貨幣的秩序の〈外部〉にあったユーラは、フレムとの結婚によって所有可能な対象(商品)となり、資本主義的な象徴秩序の「内部」に取り込まれたのだ。このようにして貨幣的去勢を被ったユーラは、あらゆる男性にとって圧倒的な魅力をもつ女神という唯一＝特異な〈使用価値〉を失い、単なる社会的役割としての女性(=「妻」という一般的な「交換価値」へと変化したのである。資本主義は、「個人の存在価値を交換価値に貶め」(Marx, *Economic* 211)、崇高なもの、神聖なものアウラを引き裂いて、ラディカルな世俗化を引き起こす。資本主義を体現するフレムとの結婚によって、ユーラは超越的な〈もの〉から接近可能な「物(商品)」へと変貌を遂げたのである。<sup>3</sup>

### 結語. 喜劇的「資本主義」批判

ジュパンチッチは、「悲劇」は接近不可能な〈外部〉を要請し、「喜劇」は〈外部〉を接近可能なものにする、と指摘していた。貨幣を媒介として、〈もの〉という〈外部〉は、「物(商品)」として貨幣的交換秩序の「内部」へと組み込まれる。『村』は周到にも「境界線の消滅」から書き起こされているが(*H* 3)、一切の〈外部〉を自らの「内部」に取り込み、境界線を消去していく資本主義の運動によって〈外部〉がなくなれば、〈外部〉を必須の構成要素とする「悲劇」は成立しなくなる。『村』におけるフォークナーの「悲劇」から「喜劇」への転回は、南部の資本主義化という小説の主題と密接に結び付いていたのである。それでは、「資本主義に〈外部〉はない」という状況のなかで、いかなる批判が可能か?すべてが資本主義の「内部」に取り込まれている以上、〈外部〉を前提とした悲劇的な批判は無効である。資本主義批判のポイントは、「内部」に組み込まれた〈外部〉を足場として、内在的な転覆可能性を探ることにある。フォークナーは、その可能性を物神に見出した。とりわけ貨幣という物神こそが、資本主義の「内部」に組み込まれた〈外部〉にほかならず、『村』でフォークナーが物神崇拜の構造分析に取り組んだのも、批判の拠点を確保し、それを笑いのうちに転覆させるという戦略のためであった。白痴アイクによる愛する雌牛と玩具の牛との「取り違え(=物神崇拜)」を、われわれは笑う。フレムの資本主義社会における成功物語が、貨幣に対する同じ「取り違え(=物神崇拜)」に基づく以上、貨幣という物神のみを欲望し続けたフレムの人生全体も喜劇的な笑いの対象となる。『村』という「喜劇」において、フォークナーは人間の主体形成および資本主義の核心に物神崇拜を看取り、人間精神も資本主義とともに物神という仮象を中心に構造化されていることの滑稽さを暴露しつつ、この根源的な「取り違え(=物神崇拜)」を笑いのめすことで、資本主義に対する全面的かつ根底的な批判を敢行したのである。

## 付記

本稿は、中・四国アメリカ文学会第37回大会（2008年6月7日、ノートルダム清心女子大学）において行った口頭発表の原稿に加筆・修正を施したものである。

## Notes

- 1 この欲望の原因＝対象たる物神<sup>フェティッシュ</sup>を、後にラカンは「対象 a」と呼んだ。
- 2 このあたりの議論については、ジュパンチッチの*The Odd One In* (173-211) を参照。
- 3 フレムはユーラの肉体という性化された「商品」を不倫という形でド・スペインに売ることによって、銀行の頭取職と広大な館という「剰余価値」を獲得し、社会的成功を達成する。

## Works Cited

- Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury*. Bloomington: Indiana UP, 1976.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990.
- Clarke, Deborah. *Robbing the Mother: Women in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1994.
- Faulkner, William. "An Introduction to *The Sound And The Fury*." *Mississippi Quarterly* 26 (Summer 1973) : 410-15.
- . *Essays, Speeches and Public Letters (ESPL)*. Ed. James B. Meriwether. New York: Random, 1965.
- . *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958 (FU)*. Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph Blotner. Charlottesville: UP of Virginia, 1959.
- . *The Hamlet (H)*. New York: Vintage International, 1991.
- . *The Mansion (M)*. New York: Vintage, 1965.
- . *The Town (T)*. New York: Vintage, 1961.
- Fowler, Doreen. *Faulkner: The Return of the Repressed*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.
- Freud, Sigmund. "Fetishism." Trans. James Strachey. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud vol. XXI*. London: Hogarth, 1961. 149-57.
- Froehlich, Peter Alan. "Faulkner and the Frontier Grotesque: *The Hamlet* as Southwestern Humor." *Faulkner in Cultural Context*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1997. 218-40.
- Gray, Richard. *The Life of William Faulkner: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 1994.
- Greet, T.Y. "The Theme and Structure of Faulkner's *The Hamlet*." *William Faulkner: Three Decades of Criticism*. Ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery. New York: Harbinger, 1963. 330-47.
- Lacan, Jacques. *Écrits*. Trans. Bruce Fink. New York: Norton, 2002.
- Marx, Karl. *Capital Vol. I*. Trans. Ben Fowkes. New York: Random, 1977.
- Marx, Karl, and Frederick Engels. *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844 and The Communist*

- Manifesto*. Trans. Martin Milligan. New York: Prometheus, 1988.
- Matthews, John T. *The Play of Faulkner's Language*. Ithaca: Cornell UP, 1982.
- Moreland, Richard C. *Faulkner and Modernism: Rereading and Rewriting*. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- Sass, Karen R. "Rejection of the Maternal and the Polarization of Gender in *The Hamlet*." *The Faulkner Journal* 4. (Fall/ Spring 1988/ 1989): 127-38.
- Skinfill, Mauri. "Reconstructing Class in Faulkner's Late Novels: *The Hamlet* and the Discovery of Capital." *Studies in American Fiction* 24.2 (Autumn 1996): 151-69.
- Towner, Theresa M. *The Cambridge Introduction to William Faulkner*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Zupančič, Alenka. *The Odd One In: On Comedy*. Massachusetts: MIT P, 2008.
- . *The Shortest Shadow: Nietzsche's Philosophy of the Two*. Massachusetts: MIT P, 2003.
- 大橋健三郎. 『フォークナー研究2』南雲堂, 1979年.
- ラカン, ジャック. 『対象関係 (上)』小出浩之他訳, 岩波書店, 2006年.

## Psychoanatomy of Snopesism in *The Hamlet* : Faulkner's Critique of Capitalism through the Lens of Comedy

AKAYAMA Kohtaro

*The Hamlet* (1940) represents both Faulkner's hostility towards the logic of capitalism and his critique of the economic and psychological conditions that constitute the capitalistic world in which Flem Snopes manages to rise from a sharecropper's son to the financial leader of the community. At the center of the novel are Flem and Eula Varner, and their marriage. Flem is an embodiment of modern capitalism, whereas Eula is a kind of earth goddess figure, positioned outside the capitalistic systems of exchange. Soon after she marries Flem, Eula essentially disappears from the text. When she reappears in *The Town* (1957), Eula has utterly changed from a sublime goddess into a stereotypical mother and wife. What transforms Eula into a banal woman?

Eula's sudden change can be best understood by analyzing the love story of the idiot Ike Snopes and the cow, since Eula's fate seems to be closely associated with that of the cow. Ike is in love with a cow; but the villagers, to prevent the idiot from "stock-diddling," slaughter the cow and feed her to Ike. Thereafter, he persists in clutching a wooden cow doll as a substitute for his lost beloved. As the cow is slaughtered and transformed into a cow effigy, so Eula is symbolically murdered and changed into a mundane woman. Something precious and singular in her is irrevocably lost. This process can be interpreted as "the murder of the Thing" from Jacques Lacan's viewpoint, and also as "the transformation of use-value into exchange-value" from Karl Marx's perspective.

The Ike-cow episode, much like Lacan's theory of desire and Marx's analysis of the form of value, uncovers the secret of both the desire for money that capitalism forces Flem to hold, and the fetishism that lies beneath it. The blissful mother-child unity, or the core of its being (what Lacan calls "the Thing") is murdered and eternally lost when the child is alienated into symbolic reality. The alienated subject desires to compensate for the lost Thing by using a substitute thing, a fetish, with which he tries in vain to plug the hole at the kernel of his being. This structure of fetishism produces and reproduces not merely Ike's desire for the toy cow but also Flem's desire for money. Their desires are caused by the misrecognition of a fetishistic thing as the lost Thing. Psychoanatomically speaking, this illusory desire for the money-fetish underlies the existence of greedy capitalism called "Snopesism."

By exploiting the fetishistic misrecognition, Faulkner tries to carry out his deconstructive critique of capitalism through the lens of comedy. Faulkner's comic strategy is to break the fetishistic illusion by revealing the banality of a thing that pretends to be the sublime Thing. At first, Eula occupies the singular place of the Thing, or use-value, excluded from the circuit of capitalist economy. When Flem owns Eula by using "the power of money," however, she is included in the capitalistic systems of exchange as a commodity, or exchange-value. The instant Flem buys her, Eula transforms from the sublime Thing (use-



赤 山 幸太郎

value) into a banal thing (exchange-value). Although the fetishists, including Ike and Flem, obsessively attempt to capture the Thing, they never can; for what they capture is always only another thing. They rush directly toward the Thing, only to find themselves with a ridiculous thing. This comic pattern which recurs throughout the novel makes us laugh. By turning the structure of fetishism itself into comedy, Faulkner seeks to subvert the capitalistic system based fundamentally on money-fetishism.

## ハインラインの『ガニメデの少年』における スカウト活動の意味とアメリカン・ヒーロー像の危機

島 克 也

### 序

ロバート・ハインライン (Robert A. Heinlein, 1907-88) による青少年向けSF小説の第四作にあたる『ガニメデの少年』 (*Farmer in the Sky*, 1950) は、第一作の『宇宙船ガリレオ号』 (*Rocket Ship Galileo*, 1947)、第二作の『栄光のスペース・アカデミー』 (*Space Cadet*, 1948)、第三作の『レッド・プラネット』 (*Red Planet*, 1949) とあわせて、『開拓四部作』 (*Four Frontiers*, 2005) というタイトルで新たに出版されていることからわかるように、アメリカの開拓時代を題材にした物語である。主人公ビル (Bill) は、日々の食糧さえ満足に得ることができない家庭に生まれ、スカウト活動に励む日々を送っているが、人生を変えるために、開拓の途上にある木星の衛星ガニメデに家族と共に移住して土地を獲得することを決意し、様々な困難を乗り越えて、遂に自営農民として身を立てることに成功する。このようなビルに、開拓時代のアメリカに移住して自営農民となってゆく移民の姿を重ねてみることは、当時の青少年読者にとってさほど難しいことではなかったであろう。

この小説は、アメリカ・ボーイスカウト連盟 (Boy Scouts of America) が刊行する月刊誌『ボーイズ・ライフ』 (*Boy's Life*) の編集者の依頼によって執筆され (Virginia Heinlein 60)、1950年8月から11月まで「衛星のスカウト」 ("Satellite Scout") という題名で連載された後、1950年末に単行本化されている。ハインラインは、読者の大多数が「スカウト活動に参加しているアメリカ在住の青少年」であることを念頭に置きつつこの小説を執筆したのである。実際、この小説には、主人公自身がボーイスカウトであること以外にも、スカウト活動に関連する様々な要素が散りばめられている。自分と同じボーイスカウトの少年が、多くの困難を乗り越えて、自営農民としての安定した生活を築き上げてゆく物語は、ジャック・ウィリアムスン (Jack Williamson) が "Scout training helps to build his competent self-reliance." (20) と説明するように、スカウト活動の価値を肯定してくれると同時に、ブルース・フランクリン (Bruce Franklin) が "Heinlein . . . projects an imaginary future that resurrects one of the most cherished symbols of the American past, the family farm, with its combination, at least in the ideal, of cooperation and independence." (80) と述べるように、アメリカの「古き良き時代」を象徴する自営農民の生活の素晴らしさを教えてくれるものとして受け止められていたであろう。

しかし『ガニメデの少年』が先行する三作と決定的に異なるのは、主人公が「偉業」を成し遂げるヒーローではないということである。『宇宙船ガリレオ号』では、主人公達は月面への初上陸を成し遂げ、地球に帰還後は文字通りヒーローとして祭り上げられる。『栄光のスペース・アカデミー』では、主人公達は金星に眠る貴重な鉱物資源を強奪しようとする一族の企みを阻止

し、宇宙の平和を守る。『レッド・プラネット』では、主人公達は植民地からの搾取を強めようとする支配者層の計画を暴露し、独立の契機を生み出す。それに比して『ガニメデの少年』の主人公ビルは、彼と共に移民船に乗ってガニメデに降り立った大勢の人々と同様に、植民地の管理組織によって与えられた区画を開墾する以上のことは成し遂げない。しかも彼は開墾に必要な知識も技術も持ち合わせていないため、管理会社や先に移住した隣人達の手助けなしには生活することができない「か弱い」存在である。さらには、未開地を探索することによって英雄になりたいという欲望を物語の冒頭から持ち続けているにも関わらず、実際に未開地を調査する機会（すなわち「偉業」を成し遂げる可能性のある機会）に恵まれても、彼はその調査から脱落してしまい、結局は自分の耕作地に留まって安定した生活を送ることに満足してしまう。すなわち、『開拓四部作』の先行する三作では、平凡な出自の人物が努力を重ねることによって偉業を成し遂げるといふ、伝統的なアメリカン・ヒーローのフォーマットがそのまま採用されているのに対して、『ガニメデの少年』ではそのフォーマットから逸脱するプロットが採用されているのである。

そこで本論では、未開の地を踏破したいという開拓者の欲望と、自営農民として平穏で安定した生活を送りたいという農耕者の欲望を同時に抱えるビルが、最終的には後者に従う理由を、彼的人格形成や意志決定に大きな影響を与えている三つの事象の中に見出すことを試みる。まず、この小説が執筆された1950年代初頭が、伝統的なアメリカン・ヒーローから、対抗文化の中でアンチ・ヒーローが生まれるまでの、ヒーロー像の移行期間であった可能性を探る。次に、ビルが没頭しているスカウト活動が、アメリカ社会において他国にはない独特な役割を担っていた側面を指摘する。最後に、当時の育児法やライフスタイルの変化が生み出していた親と子のジェネレーション・ギャップの影響を検証する。これらの考察の後に、ビルのような人物が、1950年に出版された青少年向けSF小説に主人公として登場したことの意義を考えたい。

## I 1950年代におけるアメリカン・ヒーロー像の限界

地球でボーイスカウトとして活動していたビルは、ガニメデへ移住する際にもボーイスカウトの制服を着用し、移住船の中で友人ハンク (Hank) と共にボーイスカウト・ガニメデ支部を設立することを企てる。ハンクはガニメデ支部組織委員会の会議の席上で、“[T]he Scouting tradition was the tradition of the explorer and pioneer. . . . In fact the spirit of Daniel Boone demanded that we continue as Scouts.” (68) と述べ、スカウト活動とダニエル・ブーンを関連づけている。ダニエル・ブーンは、亀井俊介が「多くのアメリカ人にとって、まさに『あらゆる過去を背後に残し、／さらにあたらしく大きな世界、変化に富む世界へと……進』んだ開拓者だった」(74) と説明する通り、開拓者型のアメリカン・ヒーローの原型とも言うべき存在であるため、ビルをはじめとする移民船に搭乗する青少年達は、スカウト活動の延長線上に、開拓者型のヒーローとしての自己実現を夢見ているといつてよい。

しかしガニメデに到着すると、移民の受け入れ体制に不備があり、父ジョージ (George) は技術者として都市で働かざるを得ず、父の代理としてビルが土地の開墾を始めることになる。ビルは、与えられた耕作地に隣接する区画に住むヨハン・シュルツ (Johann Schultz) という人物に出会う。彼はビルを暖かく迎え入れ、農耕に必要な知識や技能のみならず、貴重な物資さえも無

償で提供する頼れる人物である。シュルツの自宅の庭には、ガニメデではまだ珍しい大きなリンゴの木が植えられており、彼が初めて登場する第13章のタイトルが“Johnny Appleseed”であるため、彼がアメリカの民話に登場する人物であるジョニー・アップルシードをモデルとしていることは、当時の青少年読者にも容易に理解できたであろう。アップルシードについて亀井は、「民衆はマイク・フィンクやデイヴィ・クロケットの話を楽しみ、彼らの征服と破壊の活動に喝采しながら、どこかで心おちつかないものを感じ、逆のヒーローも求めて、ジョニー・アップルシードの話の育てたようにも思える」(154)と、開拓者型のヒーローが持つ攻撃性を中和する、温和で堅実な側面を持っていることを指摘しているが、他の少年達とは違い、ボーイスカウトの集会に参加しなくなり、昇級試験を受けようとしなくなるビルもまた、シュルツの影響を受ける中で、無意識のうちにも徐々に、開拓者精神を失っているようにみえる。実際彼は、スカウト活動を休止することで、開拓者型のヒーローとしての自己実現から遠ざかり、小説の結末部では、自営農民として生きていくことを決める。自営農民は、彼が開拓者型のヒーローとは別種のヒーローとなるべく選んだ人生とは言いがたい。なぜなら、斎藤眞がアメリカの自営農民は、「南北戦争以降、グレインジ（農業共済組合）、グリーンバック党（緑紙幣党）、農民連盟を組織し、不況に対処して農業利益の確保をはかる。さらに一八九二年の大統領選挙にさいしては、労働者にも働きかけ、全国的な第三党として人民党を組織し、権力それ自体の奪取をはからんとし、既成の二大政党を脅かす」(76)と説明するように、そのイメージには常に「集団性」がつきまとうからである。自営農民は、個性的な存在であることが重要な伝統的アメリカン・ヒーロー像とは対極の存在であり、ビルはヒーローになることを諦め、集団の中で生きることを選んだといえるのである。

土地の開墾が一段落し、生活が安定した頃に、ビルはガニメデの未開地の調査団に自主的に参加する。しかし、実際の探索作業でのビルの言動には積極性が欠落している。調査団の分隊として友人ハンクと二人で調査作業をしている際、ハンクから奥深くへと進むことを提案されると、“I want to stay in sight of camp.”(196)とためらう。ハンクは、帰路の安全も確保せずに無謀と思えるほど勇敢に調査を続けるが、ビルは虫垂炎を患ってしまうせいもあり、行動不能に陥ってしまう。ハンクは遂にガニメデの先住民の遺跡を発見するという「偉業」をなしとげ、“This is the greatest discovery since—well, since—Never mind; Columbus was a piker. We’re famous, Bill.”(200)と興奮気味に語るが、“You may be a famous, . . . I’m sick.”(200)と返事するビルは、開拓者型のアメリカン・ヒーローになりうるハンクと、ヒーローにはなりえない自分との差異をはっきりと認識している。同様に、この調査の後、父ジョージから、地球に戻って有名大学の学位をとることを勧められたときも、彼は、“Dad was right, I knew. I didn’t want to be an ignoramus. Furthermore, I had seen the advantage held by men with fancy degrees—first crack at the jobs, fast promotion.”(214)と、学歴の有効性を認めつつも、ガニメデに残って耕作を続けることを決意する。その理由として、彼は、“Hadn’t Andrew Johnson, that American President, learned to read while he was working? Even after he was married?”(215)と、過去の偉人の例を思い浮かべるのだが、彼の選択が挑戦よりも安定を志向していることは疑い得ない。

以上のようなビルの言動や意志を俯瞰してその人物像をまとめると、彼は開拓者型のアメリカン・ヒーローになりたいという願望を持ってはいたが、それを実現するに足る資質を持たず、社

会中枢における出世競争にも参加しようとせず、ただ、与えられた区画で農耕牧畜を平穩無事に営むことを選ぶ「普通の植民地人」である。このような人物が、1950年に連載された青少年向けSF小説の主人公として登場したことは、この年代において、開拓者型のみならず、様々なアメリカン・ヒーロー像が限界を迎えていたことを示しているといえるだろう。

1890年の合衆国の国勢調査局の報告を受けて、歴史家フリデリック・ターナー (Frederik Turner) がフロンティアの消滅を宣言した後、開拓者型のヒーローとなることが事実上不可能となったことはよく知られている。しかし、亀井はその後もヒーロー像の模索が続いたことを詳細に解説している。それは、新しいフロンティアを探求することによって、ヒーローが活躍する場を新たに見出そうとする試みであり、当時の人々は「文明——物質的、機械的文明」と「アメリカの外」にそれぞれのヒーロー像を生み出した。たとえば前者には、カーネギーやロックフェラーといった、金メッキ時代の富の王などと呼ばれた新興成金や、発明王エジソンのような実在のヒーローがいた。一方後者には、海の彼方のアフリカ大陸のジャングルで活躍するターザンなど、架空のヒーローが多く登場した。しかし、これらのヒーロー像もやがては限界を迎える。富の王達は、一時的にはもてはやされたが、死後もそのイメージを発展させることはついになかったし (亀井 310-17)、テクノロジーの進化を巨大企業や研究機関が担うようになってからは、エジソンのような個人の発明王型のヒーローは生まれ得なくなったからである。架空のヒーローも同様で、ターザン小説は、1912年に第一作が発表され、作者エドガー・バローズ (Edger Burroughs) が1950年に没するまで26作が出版されたが、その内容は巻を重ねるごとに「幼稚なSFまがいの冒険をターザンにくり返させる」(亀井 331) だけのものに衰退した。またSFは、1920年代に雑誌形式で出版されるようになって以来、架空のヒーローの活躍を描き続け、多くの読者を獲得したが、宇宙開発が進んでゆく第二次大戦後には、SF小説で描かれるような宇宙旅行が非現実的なものであることが明らかになっていった。そして1950年代には、『ライ麦畑でつかまえて』(Catcher in the Rye, 1951) の出版、ジェームス・ディーン (James Dean) の登場、エルビス・プレスリー (Elvis Presley) のTV出演などによって、アンチ・ヒーローという新たなヒーロー像が世間に認知されるようになる。したがって、平凡な自営農民が主人公のSF小説『ガニメデの少年』が雑誌に連載されたのは、西部開拓史に見られた開拓者型ヒーロー像から富の王型ヒーロー像・発明王型ヒーロー像に移行し、やがてこうしたヒーロー像も衰退してアンチ・ヒーローが登場してくる、その転換点の1950年であり、ターザンの連載が終わり、『ライ麦畑でつかまえて』の主人公、ホールデン (Holden) が登場する、まさにその変わり目だったのである。

## II スカウト活動によって去勢されるアメリカン・ヒーロー

『ガニメデの少年』を執筆中のハインラインはエージェントへの手紙の中で、“I need every cent I can scrape up for [house] building.” (Virginia Heinlein 60) と述べているように、大金を必要としていた。そのため彼は、『ボーイズ・ライフ』の編集者クランプ (Cramp) が提示する原稿料750ドルを拒否し、さらに約200ドルの原稿料の値上げを交渉するよう、エージェントに指示している (Virginia Heinlein 61)。ハインラインはこの小説を執筆するにあたって、構想段階からクランプの注文を受け入れており、彼がこのように強気の姿勢を取れたのも、クランプの注文に忠実

に従った良質の作品を作り上げたという自信があったからに違いない。また、『ボーイズ・ライフ』の発行元であるアメリカ・ボーイスカウト連盟には、その値上げ要求に応えることができるだけの経済的基盤があることも、彼は十分承知していたはずである。なぜなら、1950年代のアメリカでは、スティーブン・ミンツ (Steven Mintz) が “The postwar era was the golden age of scouting, with enrollment in the Cub Scouts soaring from 766,635 in 1949 to 2.5 million a decade later” (282) と具体的な数字で示しているように、急激にスカウト会員数が上昇しており、その会費収入がアメリカ・ボーイスカウト連盟に経済的基盤の強化をもたらしていたからである。1910年に発足したアメリカ・ボーイスカウト連盟の会員数は、1950年代には、スカウト活動の発祥国イギリスを抜いて世界最大を誇るまでに拡大していた。これほどにスカウト活動がアメリカに受け入れられたのは、スカウト活動とアメリカ社会の間に、他にはない親和性があったからと考えられる。

スカウト活動が成立するまでの過程については、その創始者である大英帝国の陸軍将校ロバート・ベーデン＝パウエル (Robert Baden-Powell, 1857-1941) の人生と、その交流歴を調査した田中治彦が詳しく説明している。スカウト活動の構想は、ベーデン＝パウエルが参戦し、英雄となった、第二次ボア戦争 (1899年) の経験から生まれている。彼はこの戦争において大英帝国の将来を託すべき青少年の身体とモラルの荒廃を知り、祖国防衛のための青少年教育の必要性を強く感じた。当時の大英帝国には、スカウト活動の先駆けであるボーイズ・ブリゲードと呼ばれる活動があったが、その活動の目的は、日曜学校の出席率が低い労働者階級の子弟に団結心を植え付けることであり、宗教教育と軍事訓練が組み合わされたものだった。ベーデン＝パウエルはこのボーイズ・ブリゲードの訓練方法に改善の余地があると感じ、1904年頃には新たな訓練方法を模索していた (田中 27-29)。その二年後の1906年7月、ベーデン＝パウエルの活動を耳にしたアメリカの動物学者アーネスト・セトン (Ernest Seton, 1860-1946) は、アメリカインディアンの儀式を取り入れたウッドクラフトという野外活動をベーデン＝パウエルに手紙で紹介し、ベーデン＝パウエルは、これをスカウト活動に導入することを決める。そして同年、イギリスのブラウンシー島 (Brownsea Island) に20人の子どもを集め、試験的なスカウト活動を行った。その実験は大成功を納め、スカウト活動は『スカウティング・フォア・ボーイズ』 (*Scouting for Boys*) というタイトルで書籍化され、瞬く間に大英帝国のみならず、全世界に普及した。その後スカウト活動は、第一次大戦後の非常に強い反戦平和主義の世論を受けて、それまでの国家主義、保守主義の立場から国際主義、中道主義へと転換を図り、方法論の面でも、それまで頻繁に行われていた教練 (drill) の要素を軽減し、平和的な野外活動 (ウッドクラフト) に重点を移すことによって、全世界でさらに会員数を増やし続けたのである (田中 75-76)。

このような成立過程を見てもわかるとおり、スカウト活動にはアメリカの歴史が組み込まれている。すなわち、スカウト活動の中で最も魅力的なキャンプファイアーはアメリカインディアンの儀式を、また、野外活動全般はすでに消滅したフロンティア生活を想起させる。そしてこのことが、アメリカでスカウト活動が爆発的に普及した大きな要因になったことは間違いない。だからこそビル達は、スカウト活動における訓練が、開拓者型ヒーローとしての自己実現に繋がると信じているのである。

しかし、ビルの認識は妥当とは言いがたい。なぜなら、スカウト活動は、その訓練と経験を積んだ指導者の保護と助言のもとに行われるものだからである。野外活動の区域も、指導者に

よって事前に安全が確かめられており、フロンティアのような危険をはらむ未知の領域ではない。従って、スカウトが行う野外活動は、フロンティア生活で本当に必要となる知恵・知識・生存能力を身につける訓練にはならず、ゲーム形式に還元された娯楽性の高いプログラムであるといつてよい。言うなれば、アメリカにおけるスカウトの野外活動は、「もう存在しない開拓者型アメリカン・ヒーローごっこ」として受け止められ、楽しまれた可能性が高いのである。それ故に、ガニメデの未開地調査を担当したビルとハンクは、ボーイスカウトとしての訓練を十分に積んでいたにもかかわらず、ビルの虫垂炎やハンクの怪我といった不測の事態が生じると、“I just gathered my knees up to my stomach and closed my eyes.” (200) という状態にビルが陥るように、身動きがとれなくなり、生命の危機にさえ至りかねない。

さらに、『スカウティング・フォア・ボーイズ』に記された3つのスカウトの誓いと、10項目のスカウトの掟には、神や国家への義務を果たすこと、国王・上官・両親・国家および雇主に対して忠実であること、礼儀正しくあること、両親・班長・隊長の命令に絶対服従すること、勤儉であること、思想や行為に問題がないこと、といった項目が並んでいるが、これらは国家を担う「健全な」人材育成に直結する規範といつてもよい。言い換えればそれは、個人の意志・自由・権力への反抗を否定する規範でもある。すなわち、スカウトの掟は開拓者型アメリカン・ヒーローにとって不必要であるどころか、アメリカン・ヒーローとしての自己実現を阻害する規範である。それ故、レクリエーションとしての野外活動を繰り返し、スカウト活動の規範に従うビルは、開拓者型アメリカン・ヒーローとしての自己実現の夢から自ら遠ざかっているといえる。

### Ⅲ 『ボーイズ・ライフ』からグッドライフへ

ビルは、父ジョージから、地球の有名大学で学位を取得することを二度促され、そのたびに拒絶している。第一章で述べたように、ビルは学歴の有効性を認めているが、結局は競争社会へ参加せず、隣人と助け合いながら自営農民として生きていくことを選択する。このビルの選択は、1950年代における青少年の意識と行動様式、さらには父と子のジェネレーション・ギャップを示しているように思われる。

第二次世界大戦後のアメリカ社会において、育児のキーワードは「協調性」であった。ミンツは、当時の育児において、育児関連の書籍・母親の志向性・グループ活動が連動して、協調性が重視されていたことを示唆している。

Raising sociable, secure, and adaptable children, who were “more cooperative, more consensus-oriented, more group conscious,” became a virtual obsession in postwar childrearing literature. . . . In the age of conformity, postwar mothers were not overly ambitious about academic progress for their children. Rather than wanting their children to be outstanding, they wanted their children to be normal and average—congenial and well adjusted. . . . Middle-class parents turned to a wide range of extrafamilial institutions to ensure that their children grew up well adjusted and sociable. (280-82)

言うまでもなく、“extrafamilial institutions”の一つがスカウト活動であり、スカウト会員の増加には、協調性を重んじる当時のアメリカの育児法が影響していた可能性が少なくない。そしてビルもまた、このような育児法を受けた少年のように見える。というのも、彼は、ガニメデに到着

するまではスカウト活動に熱心に参加し、ガニメデにおいて日々の農耕作業に追われ、スカウト活動に参加できない日々が続いていても、集会に参加したいという願望を持ち続けているし、少年達の団結を乱す存在であるエドワーズ (Edwards) を嫌悪し、隣人であるシュルツ家との交遊に心地よさを感じるからである。

学校教育に対するビルの意見の中にも、協調性を重視する姿勢が見受けられる。地球に戻って教育を受けることを父親に諭された後につぶやいた、“The deuce with Caltech and Cambridge and those fancy schools! I'd show Dad it didn't take ivied halls to get an education.” (215) という彼の言葉は、教育機関に通うことなく学習することは可能であるという彼の意見の反映であり、これは高等教育機関に通うことなしに発明王となったエジソンなどが体現する、アメリカの反学歴主義に他ならない。しかし、そこにはまた、高い学歴を得ることで、社会中枢における地位・名誉・金銭を巡る競争に巻き込まれたくないという、ビルの欲望も隠されている。後の『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンが「競争」を嫌うように、「競争」はエゴを全面に出し、協調性を乱す側面がある。ビルにとってはそれが忌むべきものに他ならなかったと考えられるのである。

高等教育に対する父子の態度の違いは、1950年代のアメリカでライフスタイルの違いとして顕著に現れるジェネレーション・ギャップを映し出している。このようなライフスタイルの変化について、海野弘は、「50年代には、個性的で、がむしゃらに働き、我が道を行くといったアメリカ人ではなく、私生活を大事にし、社会的には順応性に富んだ新しい都市型生活者があらわれてきた。彼らは私生活の延長である社会グループ、地域クラブに閉じこもった」(62-63) と説明している。「個性的で、がむしゃらに働き、我が道を行く」アメリカ人は、競争社会において勝者となることを目標とし、その目標を実現するための努力を当然の義務として受け入れる。彼らはいまだに伝統的なアメリカン・ドリームを信じ、自らがヒーローとなる日を夢見ている。高等教育を受けることを疑問の余地がない絶対的な善とみなすジョージもこの世代の一員である。それに対し、「私生活を大事にし、社会的には順応性に富んだ」新たなアメリカ人は、同族的で没個性的なグループ活動に向かい、静かな家庭生活というグッドライフを営むことを目標とした。ビルが競争社会ではなく農耕生活を選んだのも、そうした理由からに他ならない。

ただ、協調性を重視するビルのライフスタイルが、自分が敗者になる可能性を未然に摘み取るという性格を隠し持っていることは、見逃されるべきではない。父ジョージは植民地における技術教育を依頼されるほどの教養の持ち主だが、地球では日々の食糧すら満足に入手できなかった。言い換えるなら、彼は地球では敗者であり、再起をかけてガニメデに移り住んだのである。それ故、競争社会で勝者となるための力として、彼は息子が高学歴を得ることを望む。だが、敗北者の父の存在は、ビルに自らが敗北する可能性を強く意識させたはずである。従って、ビルが農夫となることを選んだ背景には、敗北という恐怖から逃れるために競争そのものを避けたいとする心理が働いていた、ということは十分あり得る解釈である。

#### IV 結語

作品の最後、ビルは自分にアメリカン・ヒーローとなる資質がないことを自覚している。彼はまた、スカウト活動はアメリカン・ヒーローとしての自己実現に直結するものではなく、本物の



未開地で生存のために必要な技能を提供するものでもないことを痛感している。それでもなお彼がスカウト活動が続けるのは、それが平穏な農耕生活にスパイスを与える安全な娯楽だからに他ならない。

ヒーローを必要とせず、競争も生じない協調的な農耕社会は、ビルにとって、希望に満ち溢れた生活である。虫垂炎で入院した病院から見える風景を、“It was a new, hard, clean place—not like California with its fifty, sixty million people falling over each other. It was my kind of a place—it was *my* place.” (215) と描写するように、ビルはそこに定住し、安定した生活を送ることに、人生の意義を見出している。そして、第二次世界大戦後の安定した繁栄を享受したアメリカ社会が必要としていたのは、社会の枠外に逸脱する奔放なアメリカン・ヒーローではなく、まさにこういった、強い個性や自身の意志を尊重するよりも、国や共同体の命令に従順で、国や共同体への奉仕精神を持ち、肉体的には頑強な人材だった。協調性を重んじるスカウト活動は、そのような人材を育成するのに最適の場であっただけでなく、アメリカン・ヒーローが生まれる可能性をあらかじめ消去する場としての機能を果たしていたといえる。

ところで、先行する三作品と異なって、『ガニメデの少年』においてこのような脱ヒーローの姿勢を示す主人公が描かれたのは、この作品が『ボーイズ・ライフ』の依頼に応じて書かれ、読者がスカウト活動に参加する青少年に限定されていたことが関係していたからに違いない。スカウトとしての訓練を積んだ少年が、ヒーローという稀有な存在になるのではなく、平穏で安定した生活を手に入れる可能性を示すこの物語は、娯楽としてスカウト活動に参加する読者の人生を肯定してくれるだけでなく、誰でも実現可能な「サクセス・ストーリー」の存在を読者に示してくれる。なぜなら、ビルが選んだ自営農民という職業は、長谷川善彦が、「アメリカの農業は一九五〇年代に入って僅か十年余の間に飛躍的に発展した。(中略)一人当たりの産出高の増加率は他のいかなる産業よりも高い伸びを示している」(236) と説明するような、当時のアメリカにおける「花形産業」だったからである。自営農民になることは、学歴や競争社会に煩わされることなく達成できる、立身出世の一種であったといってもよい。『ガニメデの少年』は、ヒーローになるという「夢物語」をあきらめることによって、『ボーイズ・ライフ』の読者である青少年がめざすべき中産階級者の人生の幸福を示してもいたのである。

このように、『ガニメデの少年』は掲載雑誌の意図を十分に汲み、スカウト活動が当時のアメリカの社会システムを維持する重要な装置であることを描き出しているが、その一方で、スカウト活動が国民の自主・独立の精神を損なうという副作用も描いているということができよう。田中はこの点について、スカウト活動は必要以上に保護的でもあるため、青年期を不必要に延長し、「モラトリアム青年や、文字通りピーターパン・シンドロームを作ってしまう」(57) と警告しているが、ビルにも同様の傾向が窺える。そしてそれは、作品の未来に暗い影を投げかける。というのも、ビルは自分の耕作地を天災によって一度は失っているし、ガニメデが先住民によってなんらかの理由で遺棄された衛星であるため、彼が再び土地を失う可能性が仄めかされているからである。しかも、娯楽としてのスカウト活動に興じることによって生存能力の弱体化を招いてゆくなら、「新しく、清潔な、僕の同類の、僕の土地」と彼が祝福するものも、将来の危機において守られないかもしれないからである。

『ガニメデの少年』の出版から五年後、ハインラインは青少年向けSF小説『ルナ・ゲートの彼

方』(*Tunnel in the Sky*, 1955) を出版する。この小説では、不慮の事故で未開の惑星に放置された青年ロッド (Rod) が、仲間達と協力して様々な苦難を乗り越え、原始的な自給自足の生活環境を築き上げるが、彼は、ビルと同様に、平穏で安定した生活を求める脱ヒーロー的人物の性質を帯びている。そして、小説の最後、救援に来た政府によって退去を命じられた時、ロッドは僅かな反抗を見せはするものの、おとなしくその指示に従って入植地を譲渡してしまう。『ガニメデの少年』で示された、平穏で安定した農耕牧畜がもたらす幸福な生活は、『ルナ・ゲートの彼方』において権力に屈し、終焉を迎えるのである。

## 付記

本稿は、中・四国アメリカ文学会冬期研究会 (2010年12月11日、広島大学) にて行った口頭発表に、大幅な加筆、修正を加えたものである。

## Works Cited

- Franklin, Bruce H. *Robert A. Heinlein America as Science Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1980.
- Heinlein, Robert. *Farmer in the Sky*. New York: Scribner's, 1950.
- Heinlein, Virginia, ed. *Grumbles from the Grave*. New York: Ballantine, 1989.
- Mintz, Steven. *Huck's Raft*. Cambridge, MA: Belknap P of Harvard UP, 2004.
- Williamson, Jack. "Youth Against Space: Heinlein's Juveniles Revisited." *Robert A. Heinlein*. Ed. Joseph D. Olander and Martin Harry Greenberg. New York: Taplinger, 1978. 15-31.
- 海野 弘『黄金の五〇年代アメリカ』講談社, 1989.
- 亀井 俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』研究社出版, 1993.
- 斎藤 眞『アメリカとは何か』平凡社, 1995.
- 田中 治彦『ボーイスカウト 二〇世紀青少年運動の原型』中公新書, 1995.
- 長谷川善彦『アメリカ農業物語』東京大学出版会, 1966.

Robert Heinlein's *Farmer in the Sky*:  
Traditional American Heroes Displaced by Boy Scouts

SHIMA Katsuya

In *Farmer in the Sky* (1951), serialized in a magazine for Boy Scouts, Robert Heinlein depicts the life of an immigrant on Ganymede, one of the satellites of Jupiter. This person, trained as a Boy Scout on earth, wants to be a heroic pioneer on Ganymede, but eventually decides to make a living in agriculture. Although leading characters in juvenile science fiction usually accomplish great things, Bill, the leading character of *Farmer in the Sky*, lacks the ability to realize his dream. My aim in this paper is to show the reason why such an ordinary person appears in a juvenile science fiction novel.

Bill's ambivalence about his own life represents the transitional period from the age of the traditional American heroes to the age of the American antiheroes. As Kamei has suggested, pioneers such as Daniel Boone, robber barons such as John Rockefeller, and masters of invention such as Thomas Edison are regarded as American heroes. They played important roles in American society before the twentieth century. The disappearance of the frontier and the development of technology, however, made such heroes seem old-fashioned. On the other hand, antiheroes such as Holden Caulfield in *Catcher in the Rye*, James Dean, and Elvis Presley gained popularity in the 1950s. Bill finally realizes that it is impossible to become such a traditional hero, and does not know how to become a new kind of hero.

There is a close relationship between Bill's career as a Boy Scout and the limit in his ability to make a heroic effort. The original purpose of "Scouting" was to protect young people of the British Empire from harmful social elements and to bring them up healthily. In America, however, Scouting has often been regarded as entertainment for boys and girls who want to enjoy outdoor life. When Bill attends an expedition to the frontier of Ganymede, his Scouting skills do not enable him to make a major discovery. Even when he faces a crisis in his life, he cannot overcome it through his own abilities.

The child-raising method of the 1950s had a great effect on Bill's desire to make a living in agriculture and to continue his Scouting activity. As Mintz has asserted, middle-class children in the 1950s were expected to be normal, average, and adaptable. Since one of the most important features of traditional American heroes is to be superior to ordinary people, middle-class children in the 1950s cannot actualize their dreams but can make heroic gestures.

The transitional period of American heroes, the popularity of Scouting, and the child-raising method of the 1950s indicate the approach of an age in which people no longer have a chance to realize the American dream. This novel does not encourage young readers to dream of heroic achievements, but depicts the tranquil and stable life of an ordinary person as an ideal.

## 中・四国アメリカ文学会第39回大会シンポジウム E.A.Poe、語り継がれる名作——「モルグ街の殺人事件」

### まえがき

伊藤 詔子

「モルグ街の殺人事件」(“The Murders in the Rue Morgue”)は、「グレアムズ・マガジン」(*Graham's Magazine*) 1841年4月号が初出である。2009年に生誕200周年を迎えたポー (Edgar Allan Poe) の代表作として、今年は出版170年を迎える。世界最初の探偵小説として燦然と輝く記念碑的名作で、パリには「死体置き場街」という通りは実在しないものの、ポーリン (B.R.Pollin) の研究によると、それはパレ・ロワイアルの裏通りという興味深い設定であるという。それにしても何故パリなのか。研究は場所のソース研究、デュパンのモデルについての研究、作品影響研究など営々と展開されてきた。生誕200周年のフィラデルフィア国際大会でもこの作品に関する発表が多かったのは、「グレアムズ・マガジン」が当時のフィラデルフィアで代表的雑誌社であったことや、ジャンルの草分けとして尽きない魅力があるからだろう。

まったく新しい文学ジャンルを創始し、多くの探偵作家を生み、其の面白さはなお語り継がれ謎も解明され尽くしてはいない。この作品は、探偵小説トリックの原型、密室殺人、動機なき殺人、動物犯人など多くのからくりを創造し、パリ警察に対峙する私立探偵デュパンと無名の語り手というミステリー・ナラティヴのフォーミュラを確立し、ポー文学の本質が読み取れる都市小説のはしりともなった。探偵小説の技巧については日本では特に、江戸川乱歩が詳細に論じたのを嚆矢とし、アメリカでは最近従来とは別の新聞記事との関連を論及する、コプレー (Richard Kopley) の研究書『ポーとデュパンのミステリーもの』(*Edgar Allan Poe and Dupin Mysteries*, 2009) が出た。

何故このような作品が生まれたか研究は大きくいって三つの方向から進んできた。一つはポー文学の内部からで、主人公・語り手の変容の結節点に当たる「アッシャー館の崩壊」「群衆の人」以降の先駆的作品としてであり、アッシャーからデュパンへの変化を論じるもの。なかでも語り手と場の質の変化が主要な論題となってきた。

今一つは社会状況からの研究で、最も画期的なものはベンヤミンの『ボードレールに於ける第二帝政期のパリ』(1938) で明らかになった群衆の発生や、フラヌールの詩学からする解釈であった。日本でも笠井潔の『デュパン第4の事件、群衆の悪魔』(1996) がでて、「モルグ街」とヨーロッパ社会史の関連が言及され、またディッケンズのロンドンとの比較も重要となる。

さらにアメリカンルネサンス期の視覚の拡大は、写真のみならず新しい視覚テクノロジー、パノラマ館やステレオスコープの発明、ジオラマやテレスコープやマイクロスコープのさらなる

進化をもたらし、視覚に取り憑かれていた多くの作家に深い影響を与えたことから文化史的アプローチも重要である。リュングキスト (Kent Ljungquist) やバイヤー (Robert H. Byer) やスィーニー (Elizabeth Sweeney) 等による詳細な研究が、ポーの視覚と風景を巡る観点からポー文学全体の軌跡を辿ってきた。大量印刷革命の時代を生き、最新のテクノロジーを作品のみならず幅広く編集技術に取り込んでいったポーは、中でも視覚世界の大変革をもたらしたダゲレオタイプ (銀版写真) には格別の関心を抱いていた。というのもポーの視覚表象への関心は、視覚に関わるテーマが横溢する「ウィリアム・ウィルソン」『アーサー・ゴードン・ピムの冒険』『楕円形の肖像』等に無数に見られるからである。写真の登場と探偵小説は深く関係し、「モルグ街」でも、デュパンの新たな視覚が問題となる。

今日のシンポでは、講師5人でさらに異なるアプローチから語ることで、この作品の歴史的意義と多面的魅力、主人公デュパン像を浮かび上がらせたいと考えた。まず、軍隊時代のポーと作家ポーの比較研究を、池末陽子氏との共著『悪魔とハープ』を出され、各学会誌で新しさを賞賛された近畿大学文芸学部准教授の辻和彦氏に論じていただく。次に探偵小説家、また探偵小説批評家で、最近日本推理作家協会賞も受賞し、近畿大学文芸学部創作コースで教鞭もとられている小森健太郎氏に、現代に息づく密室派 (locked school) ミステリーの系譜について語っていただく。作家のシンポジウム参加は、この学会では初めての試みである。次に、ポー作品は映画と絵画など実に多くの他のメディアとの関係が深いわけで、ポー文学のホラーの源泉性について文化論の立場から、京都外国語大学教授の元山千歳氏に展開していただく。各講師25分話していただき、ここで前半の休憩を15分ほどとる。そして後半、都市作家としてのボードレールとの比較を、愛媛大学教授の林康次氏に論じていただく。最後に伊藤が、この名作を生み出した二つの要素、ダゲレオタイプと密室に焦点を当て、風景構築が密室のトリックと深く関連することを述べたい。各論のタイトルはいかのとおりでである。

辻 和彦——「プライベート・ベリーと推理小説」

小森健太郎——「ポーと密室ミステリの系譜」

元山千歳——「恐怖、輪郭のデフォルメ」

林 康次——「ポウの〈愛〉の19世紀——デュパンとボードレールの危機」

伊藤詔子——「密室の謎とダゲレオタイプ」

シンポ自身がフロアーの参加を得て、ポーとデュパンの謎を追う形になればと願っている。

## プライベート・ペリーと推理小説

辻 和 彦

### 1 「プライベート・ペリー」の誕生

1827年、18歳の青年エドガー・ポーは、その前年にヴァージニア大学を退学したこともあって、養父ジョン・アランとの折り合いがわるくなる。その結果、彼が選んだ道は、養父からの独立であった。

5月26日、エドガー・A・ペリーという偽名を用いて、彼はアメリカ陸軍へ入隊した。父と母と幼くして別れ、一家離散を経験している彼は、おそらくはこの当時ポーという家名に屈折感を感じており、またその後養子にはしてくれたものの、次第に冷たくなっていった養父アランを恨んでいたことだろう。アランでもなくポーでもない、エドガー・A・ペリーという偽名を用いることで、彼はこれまでのアイデンティティを消し去り、一兵卒として自らの新しいキャリアを創造しようという決意を持っていたと思われる。

結局ポーは陸軍を除隊するのだが、1830年にウェストポイント陸軍士官学校に入り、士官への道を志すことになる。だがこれもうまくいかず、やがて軍隊と永遠に袂を分かつことになる。

さて従来のポー研究ではこの短いポーの軍歴をあまり重視せず、少なくとも21世紀に入るまでは、ポーのこの軍歴と作家人生や個々の作品との関連を重くみた批評家や研究者は非常に少なかった。

2005年に出版されたウィリアム・F・ヘッカー編集による『プライベート・ペリーとポー氏』(Private Perry and Mister Poe)は、その意味において、非常に意義深い研究書といえる。ヘッカーによるポーの軍隊時代の研究分析と、この時代にポーが私費出版した詩集二版の複写判を収めたこの本は、見かけは小さな本ではあるが、新しいポー像を提起する十分なアイデアに満ちている。

ヘッカーがこうした点に注目しえた背景には、彼自身がウェストポイントでエンジニアリング・マネジメントを学び、その後オレゴン大学で英語学修士号をとったという異色の経歴の持ち主であったからであり、この研究書の出版当時には、ウェストポイントで英語学専攻のアシスタント・プロフェッサーを務めていた。

ヘッカーは同書の中で、これまでの伝記研究者達がポーの軍歴を軽視してきたことをかなり厳しく批判した上で、従来あまり知られることのなかったポーの軍歴とその文学活動との関係に焦点をあてることにある程度成功している。たとえば従来の研究では、軍隊とポーはそれまでの経歴からあまりにかけ離れたものとしてとらえられ、若い詩人のロマン主義的衝動によるものであるとか、「消えてしまったかったから」(Hecker xix) などという、自殺願望じみたものとして捉えられることが多かったのだが、ヘッカーは180度正反対の見解を示している。ポーの祖父デイ

ヴィッド・ポーがアメリカ独立戦争で補給部隊副隊長を務めて地元で英雄視されていたこと、またまたこの祖父の貢献ぶりに長らく感謝していたラファイエット侯爵が1824年にアメリカに国賓として再訪した際リッチモンド少年義勇軍中尉として、軍服を着用した少年ポーがそれを出迎える大役を果たしていることを指摘し、ポーの家系に軍人の意識が脈々と流れていたこと、また次第に養父から心が離れていったポーが、年と成長すると共にそちらの世界へ惹かれていった可能性を示唆している。

実際、養父アランに当時ポーが送った手紙の中には、祖父デイヴィッドの人脈がウェストポイントの中で十分通じていることを自慢するものもあり (xxvii)、この頃の彼のアイデンティティが、裕福な商家のアラン家から「ポー將軍」と地元で呼ばれていた祖父由来のものへと移行し、同時に新しい野心を抱き始めた様子が伺える。

さらに重要なのが、彼の軍隊の中での昇級についてである。1828年5月1日から、ポーは「兵卒」から特務兵（機械技術兵）となっている。従来ここに注目する向きはほとんどなかったが、ポーと同様にウェストポイントで学んだヘッカーは、このかなり早い昇級が軍人ポーの並々ならぬ素質を示していることを示唆し、またこれによってポーの俸給が倍になったことを明らかにしている (xxxiii)。1829年1月には、ポーは連隊特務曹長に昇級し (xli)、何と入隊2年以内に兵役期間における最高位にまで登り詰めている。しかしながら、この早すぎた昇進がポーの野心に火を点けることとなり、彼はウェストポイントへ進学することを決意するのだが、結局は養父アランが学費を支払うことを拒んだため、失意のうちに軍隊を去ることとなる。

## 2 ホイスト、トマス・ブラウン卿、死体

ヘッカーの見解によると、従来考えられてきたよりポーが昇級した特務兵は地位が高いものであり、実質的には、属していた砲兵中隊の最重要ポジションに配属されたわけである。従って特務兵ポーは中隊全体から厚い信頼を寄せられるよう、爆弾が定まった場所定位置で爆発するように完璧に資材を手配し、準備する必要がある、ミスは決して許されない立場にあったので、そのための徹底した教育を受けたはずだった。

当時ポーが使用していたと考えられるテキストはただ一つしかなく、ヘッカーによれば、1809年に出版されたその『アメリカ軍砲兵手引き』をポーは熟読せざるをえない地位にいた。『アメリカ軍砲兵手引き』は、確実な数学計算のもとに、確実に爆薬を準備し、確実にヒューズをセットすることを説いており、計算間違いが大惨事を生むことについて警告していた。丁寧に注意深く設計し、準備し、金属と化学物質を混ぜ合わせたシステムを作り合わせ、最終的に自らの創造物を確実に爆破することによって美学的に破壊する。軍隊時代のポーは日夜そうしたトレーニングを受け続け、そしてその昇進ぶりから窺い知れるように、まさにそのエキスパートとして上司に認められる存在であった。

こうした『アメリカ軍砲兵手引き』に見られるような思想や考え方が若いポーの文学的素養に確実に影響を与えたはずだというのが、ヘッカーの考え方であり、徹底的に慎重に計算された設計によって生み出された方程式こそ、究極の美の放出に結びつくのだという、後に『詩の哲理』で展開されるような、ポーの数学的発想好き、いわゆる「理系的発想」の原点が『アメリカ軍砲

兵手引き』にあるのだ、とヘッカーは説いている。彼はまたポーの詩や小説における使用法などから、語彙のレベルでもポーが軍隊自体から大きな影響を受けていることを論じており、「タマレーン」や「ヘレンへ」などのポーの代表的な詩がどれほど砲兵としてのポーの知識に基づくものなのかを立証している。

このようにヘッカーの主張は驚くほど興味深く、それ以外の作品にどれだけポーの軍歴が影響しているかについても知りたくなってしまいが、残念ながら彼の論文は短いものであり、一種アイデアの提示に終わっている側面もあって、ポーの人生全体や作品全体の軍歴の影響についてはうかがいしれない。しかしながら、最初の近代推理小説ともしばしば評せられる「モルグ街の殺人」を再度熟読してみると、そうした影響を窺い知れる部分は数多いように思われる。

例えば、物語の核でもあるレスパネエ母子の惨殺死体が「異常殺人」と冒頭で扇情的に書かれた新聞記事によって描写される場面において、この母子はオランウータンによって惨殺されたことが、デュパンの推理によって明らかとなるのだが、頭部を下にして煙突に押し込まれた娘の死体はともかくとしても、レスパネエ婦人の死体は、刃物による傷害事件のものにはまったく読めない。ポーが表現しようと試みている「バラバラ死体」は、オランウータンの超人的かつ悪魔的な並外れた力を誇張して描くためとしても、もはや度が過ぎており、この小説の中の新聞記事と検死報告の描写を忠実にそのままとらえるならば、レスパネエ婦人の遺体は、猿や人が刃物を使用して発作的に行った犯行の結果であるというより、爆発によって致命的損傷を受けた死体の描写に近いように思われる。ポーが軍隊時代に、直接爆破死体に触れたことがあるかどうかは定かではないが、彼が従軍当時、常にそうした負のイメージを描きながら職務に携わっていたことは、ヘッカーの研究結果によって明らかである。自分の火薬の調合がわずかでもまちがっていれば、設置や調整がわずかでもずれていれば、文字通りレスパネエ婦人のような死体が続出する結果となりかねない。おそらく『アメリカ軍砲兵手引き』を何度も読み返しながらか、砲兵隊特務兵として、ポーはこのような緊張感を持ちながらか、爆弾に日夜携わり続けたのである。

このように「モルグ街の殺人」とその背後には、特務兵として「死」と接しつづけた日々の緊張感を読み取ることができ、ポーが若き日に過ごした軍隊での日々の影響を窺い知れることは十分に可能である。

### 3 兵士、作家、探偵

凶悪犯罪を取り締まる、秩序ある警察組織、またトップに警視総監がいるような、高度な官僚システムとして既に構築済みの組織のモデルとしての治安組織は、ポーが生きている間に住んだどの都市も、彼がこの小説を発表した1841年にはまだ持ち合わせていなかった。従って、作品中の警察組織のモデルは、文字通りパリのものである。なぜならば、1800年にパリ市警察並びにパリ警視総監を設置し、1829年に世界初の制服を着た警察隊を登場させたパリこそ、世界でもっとも犯罪捜査の最先端をいく都市であったのは間違いないからである。

しかしいずれにしても、当時の各国、各都市の警察部隊の設置、再編では、軍隊がモデルとされ、おそらくその人員も退役軍人など軍隊経験者が多かったことが容易に推測できる。文字情報では、こうしたフランスやイギリスの最先端の警察組織を知っていても、直接それらを見聞きし



たわけではないポーが、作品創作上イメージを膨らませるもととなったのは、やはり自身が所属して、よく知っている組織であるアメリカ陸軍の組織だったのではないだろうか。ポーは1831年にウェストポイントから放校処分を受けているが、軍隊から離れてちょうど10年を経た1841年に世に出た「モルグ街」の世界を成立されているものの一部が、こうした軍自体の様々なイメージや思い出であったとするなら、いかにも興味深いことのように思われる。

#### 4 帰還しなかった兵士

1831年2月にエドガー・ポーはウェストポイントを去り、以後永久に軍と袂を分かった。しかしながらおそらくは4月頃に出版した詩集の献辞に挙がっているように、ポーの軍への想いや、軍体験からの影響は彼の残りの人生と、産み出されていった作品群の中に流れ、おそらくは「モルグ街」を産み出す原動力の一部ともなったと考えられる。

しかしながら、ここで話を閉じる前に、もう一人の帰ってこなかった兵士について触れておく必要があるだろう。ポーとその軍歴との関わりに注目し、これまでの米文学者ができなかったリサーチを成し遂げ、新しいアイデアを世に送り出して、さらなるこの分野での活躍が期待されたヘッカーは、出版翌年の2006年1月5日に、37歳という若さでこの世を去った。従軍中のイラクで、他の四人の兵士と共に路上に仕掛けられた爆弾によって死亡したのである。

ウェストポイントでエンジニアリング・マネジメントを学び、ポーが砲兵隊特務兵としてどのような仕事をなしていたかを明らかにし、ポーが当時の教科書である『アメリカ軍砲兵手引き』から大きな文学的影響を受けていたことを指摘したヘッカー自身が、爆弾によってこの世を去ったことは、皮肉としか言いようがない。だが、彼が自分自身の死でもって、『プライベート・ペリーとポー氏』の最終章を書き上げたのだとすると、まさにこの「軍隊と文学」、もしくは「戦争と文学」という主題こそが、文字通り「火薬」のようなテーマであることに、改めて気づかされる。「モルグ街」では、二人の貴重な人命を奪ったオランウータンは植物園へ引き渡され、罰されない。だが本物の軍隊を離脱した者は、二度と元の世界に帰れないのが常道なのかもしれない。軍隊を辞めて市民社会へ戻ってきたポーもまた、一種の文学「モンスター」としてしか生きられなかったのだから。

#### 引用・参考文献

- Harrison, James A., ed. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. 17 vols. New York: AMS, 1979.
- Hayes, Kevin J., ed. *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Hecker, William F. *Private Perry and Mister Poe: The West Point Poems, 1831*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2005.
- Hutchisson, James. M. *Poe*. Jackson: UP of Mississippi, 2005.
- Kennedy, J. Gerald, and Liliane Weissberg, eds. *Romancing the Shadow: Poe and Race*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Levine, Stuart, and Susan Levine, eds. *The Short Fiction of Edgar Allan Poe*. Urbana: U of Illinois P, 1990.

E.A.Poe、語り継がれる名作—「モルゲ街の殺人事件」

Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Edgar Allan Poe: Tales and Sketches*. 2 vols. Chicago: U of Illinois P, 2000.

[Published as *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. 2-3. 1978.]

Pearl, Matthew. *The Dante Club*. New York: Random House, 2003.

———. *The Poe Shadow*. New York: Random House, 2006.

Pollin, Burton R., ed. *Collected Writings of Edgar Allan Poe*. 5 vols. New York: Gordian, 1985-97.

Quinn, A. H. *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1997.

Spiller, Rober E., et al, eds. *Literary History of the United States: History*. New York: Macmillan, 1974.

Thomas, Dwight and David K. Jackson. *The Poe Log: A Documentary Life of Edgar Allan Poe 1809-1849*.

New York: G. K. Hall, 1987.

## ポーと密室ミステリの系譜

小 森 健太郎

エドガー・アラン・ポーが、探偵小説の祖であるという通説は、その後の探偵作家たちに与えた影響の巨大さをもってしても証される場所であるが、デュパンが初めて登場する「モルグ街の殺人」は、密室という趣向が初めて盛り込まれた作品でもあり、その後の探偵小説ジャンルにおいて連綿と書かれ続けていく密室という趣向の先鞭をつけた作品でもあった。

密室ミステリの元祖となる作品はどれかという点については、これまでもいくつか議論がなされていて、たとえば、イギリスの探偵作家で聖書研究者でもあったドロシー・L・セイヤーズは、旧約聖書外典にある「ダニエル偽書」で、ダニエルが、閉じ込められた密室の秘密の抜け穴から脱出してみせた話にその原型を見いだしている。英米で密室探偵小説と目されるものを可能なかぎり収集した、密室研究家ロバート・エイディーの研究書では、ポーの「モルグ街の殺人」に先立つこと三年、レ・ファニユの「アイルランドのある伯爵夫人の秘めたる体験」（一八三八年）であるとされている。この短編は、後に『アンクル・サイラス』（一八六四年）として長編化されている。しかし、ミステリのジャンルにおいては、レ・ファニユの密室ものが参照されることは少なく、圧倒的にポーの「モルグ街の殺人」の方が、影響力は大きく、その後のミステリ作品の範となり路標ともなった。不可解な状況を合理的な説明によって解決するレ・ファニユの密室物語と、名探偵デュパンが特異な論理を駆使して密室の謎を裁断する「モルグ街の殺人」の間には決定的な段差がある。

コナン・ドイルは、有名な名探偵・シャーロック・ホームズを造形するにあたり、そのキャラクターのイメージを、ポーのデュパンものから借用している面があり、そのことは自伝『わが思い出と冒険』でも告白している。依頼者と話をする前に、依頼者の素性を考えていることを見抜いて驚かせるやりかたや、分析的知性を強調するくだりなど、『緋色の研究』（一八八七年）で初登場したホームズは、先行者デュパンに多くを負っている。ホームズ物語のいくつかは、ポーの短篇の影響を濃く受けていて、たとえば、「踊る人形」に出てくる暗号は、ポーの「黄金虫」の暗号と基本的に同じプロセスによって解明される。ホームズものの短篇の第一作「ボヘミアの醜聞」（一八九一年）は、大事なものの隠し場所をめぐるプロットや展開が、明らかにポーの「盗まれた手紙」を踏襲している。そして、ホームズ物語の一作として有名な「まだらの紐」（一八九二年）は、密室という趣向において、ポーの「モルグ街の殺人」の謎と設定を受け継いでいる。だが、密室の謎という設定の大枠は受け継がれていても、真相の解決法はドイル独自の創案であり、ポーの「モルグ街」とは異なっている。この「まだらの紐」において、密室という謎がパターンとして、ひとつの定番として、探偵小説野のジャンルに認知され、多くの探偵作家がその謎と解明に挑むという伝統の基盤が築かれることになる。

「まだらの紐」が発表されたのとほぼ同時期に、ユダヤ系イギリス人作家イブrael・ザング

ウィルが『ビッグ・ボウの殺人』（一八九一年）という、重要な密室ミステリを刊行している。その序文でザングウィルは、近頃のミステリが軽薄なのを嘆き、ポーの小説の如く、「戦慄と恐怖の雰囲気」を持つべきだと説いている。また、ザングウィルは、「どこからも出入りできない部屋の中での殺人事件を描いたミステリ作家はいない」と述べ、自分がその難しいミステリを初めて書いたとしている。ザングウィルは、ポーの「モルグ街」の部屋は、錠窓の釘が中折れしているなど、密閉状況が不十分とみなしていたらしい。また、有栖川有栖の『密室ミステリ図鑑』では、ポーの「モルグ街」には、犯人が密室をつくろうとする意図的なトリックの構成がなく、そのトリックをミステリに初めて持ち込んだのは、『ビッグ・ボウの殺人』のザングウィルであろうとしている。見方によっては、密室ミステリの元祖は、ポーでなくザングウィルであるという説も成り立ちうる。

フランスでは、ガストン・ルルーが『黄色い部屋の謎』（一九〇七年）という重要な密室ミステリを刊行している。その執筆動機に関してルルーは、コナン・ドイルとポーを越えるミステリを書こうとしたと述べている。その謎の中心に密室を据えた点についてルルーは、「モルグ街の殺人」も「まだらの紐」も、厳密には部屋に出入りできる抜け穴があったと指摘している。その上で、ルルーは、『黄色い部屋の謎』において、そういう抜け穴のない、完璧な密室の謎を提示してみせたと自負している。

第一次世界大戦前までの探偵小説作品のうち、特に密室の謎を扱った作品として影響の大きい、重要な作品は、以上にあげた、ドイル「まだらの紐」、ザングウィル『ビッグ・ボウの殺人』、ガストン・ルルー『黄色い部屋の謎』である。いずれもが、ポーの「モルグ街の殺人」に触発され、ポー（およびルルーにとってはドイル）を乗り越えようという意気込みによって書かれた作品である。これらの作品によって、探偵小説のジャンル、特に密室の謎を扱う作品の幅と裾野が大きく広がることになる。

これらの作品ほど有名でないが、サミュエル・ホプキンズ・アダムスの書いた「飛んできた死」（一九〇三年）という短篇作品も、密室の幅を広げた点で看過できないものがある。この作品での殺人現場は、閉鎖密閉空間ではないが、足跡をつけずには近づけない砂浜である。それなのに、犯人の足跡がついていないという不可解な謎を提出している。密室の謎の設定を、不可能犯罪というくくりを広げてみせた点で、この作品は重要である。

また、『ブラウン神父の童心』（一九一一年）以降のブラウン神父を主人公の探偵とする連作で人気を博したG.K.チェスタトンもまた、いくつもの密室の謎、不可能犯罪の謎を扱ったミステリを書いて、密室ミステリの歴史に名を刻んでいる。「ムーン・クレサントの奇蹟」や「犬のお告げ」といった重要な作品があり、密室の解明とあいまって、形而上学的な議論を持ち込んでいる点でチェスタトンは、ドイルやルルーと違った形でのポーの後継作家である。また、ドイル、ルルー、ザングウィルは、密室のミステリに関しては、ほぼ一作に集約され、広義の作品ではまだ何作かあるとは言え、持続的に密室の謎ばかりを扱う作家ではなかった。チェスタトンは、断続的とは言え、ブラウン神父の連作の中で十回以上も、密室の謎を扱わせ、この手の謎を連続的に扱う作風を確立させた作家としても重要である。日本にはあまり翻訳されていないが、アメリカの女性作家、カロライン・ウェルズも、密室と不可能犯罪を持続的・連続的に扱う作家として、ほぼチェスタトンと同時期に活躍している。

そして、一九三〇年にデビューする、ディクソン・カーは、密室派の総帥とも呼ばれ、密室の謎を中心に据えたミステリを大量に発表し、ミステリにおける密室と不可能犯罪をジャンルとして大成させた作家と言える。エイディーのカウントによれば、カーの長編七十一のうち、広義の密室ものは五十八、短篇・戯曲三十九のうち、広義の密室ものは三十六を数える。ミステリのジャンル創成期には、謎のひとつの趣向にすぎなかった「密室」が、カーにあっては、ほとんど専門的にそればかり扱われることになる。

また、ディクソン・カーは、その小説『三つの棺』（一九三五年）において、密室分類を初めてなした作家である。カー以降の密室講義の系譜については、拙著『英文学の地下水脈』中の「密室講義の系譜」という論の中で詳述した。カーの密室分類の大要は、以下のようになっている。

カーは、実際に犯人が室内にいなかった場合Aと、犯人が室内にいて、ドアや窓に細工して脱出した場合Bに大別している。そのAは以下の七つの項目に分けられている。

- 一、さまざまな偶然が重なったことによる殺人のように見える死。
- 二、殺人のように見える自殺や事故死。
- 三、部屋の中に殺人のために設置された機械的な仕掛けによる殺人。
- 四、わざと殺人のように見せかけた自殺。
- 五、錯覚や偽装によって、密室のように見せかけるもの。例としては、既に死んでいる被害者を生きているように見せかけることによって密室と誤認させる。
- 六、室外にいた犯人が、室内からの犯行のように見せかけたもの。
- 七、まだ生きていた被害者を先に死んだかのように錯覚・誤認させることによって密室を構成する。

また、Bは、以下のように五つに大別されている。

- 一、鍵穴に鍵を差し込んだままで細工する方法。
- 二、錠や差し金に触らず蝶番を外してしまう方法。
- 三、差し金に細工する方法。
- 四、カンヌキや掛け金を落とす仕掛け。
- 五、殺人犯が死体発見後に鍵を室内にもたらす。

この各項目について、カーは、該当する作例をいくつもあげている。この作品を書いた時点でカーが知っていた密室ミステリの作例は、数百には及んでいたと推定され、この時点で、既に相当量の密室ミステリが累積していることがわかる。

ディクソン・カーに続いてアメリカで登場した、クレイトン・ロースンや、アンソニー・パウチャー（別名H.H.ホームズ）もまた、カーにならって、密室の謎ばかりを扱う探偵小説作家で、「密室派」と称された。ロースンやパウチャーもまた、作中で密室講義を展開して、カーに追随している。

このような密室ミステリの流行は、英米から輸入して後追っていた日本の探偵小説にも多大

な影響を及ぼした。日本で、探偵小説の父と呼ばれる江戸川乱歩は、名探偵・明智小五郎が初登場した「D坂の殺人事件」で、日本的な舞台の設定のもと、密室ミステリを書いた。その後も、長編『孤島の鬼』などでは、広義の密室、不可能犯罪の謎が扱われる。少年探偵団と怪人二十面相の対決を描く少年探偵ものシリーズの中では、あらかじめ用意された抜け道から抜け出す解決がほとんどだが、密室からの怪盗の謎の消失という趣向が頻出する。『三角館の恐怖』という作品で乱歩は、ロジャー・スカーレットによる名作『エンジェル家の殺人』を翻案しているが、この作品は、閉鎖されたエレベーターでの刺殺の謎を扱った密室ミステリである。

江戸川乱歩の作品に趣向として密室の謎は頻出するが、翻案の『三角館の恐怖』を除いて、本格的に密閉閉鎖空間での不可能状況に挑んだと言えるほどの作品はない。日本でこの趣向にほぼ最初に挑戦した作家として、小栗虫太郎があげられる。その「新青年」に掲載された作品「完全犯罪」（一九三三年）が、日本でほぼ初めての、堅牢の密室の謎を扱った探偵小説と言える。

第二次大戦中の逼塞期を経て、終戦後に探偵小説は劇的に復活する。そのムーブメントを先導した横溝正史による、終戦後の第一長編『本陣殺人事件』（一九四六年）、第二長編『蝶々殺人事件』（一九四七年）は、いずれも密室の謎をメインに据えた、本格探偵小説である。また、名探偵・神津恭介を主役とする連作で華々しくデビューした高木彬光の『刺青殺人事件』（一九四八年）もまた、密室の謎を主眼とする本格探偵小説である。横溝正史・高木彬光・山田風太郎らの活躍によって、戦後の探偵小説ブームといわれる時期を彩った重要作は、密室の謎を扱ったものが多い。

一九五〇年代後半以降、松本清張の主導する社会派推理小説が主流となった時代には、名探偵や密室の謎といった道具立ては、現実的でないと退けられる傾向が強かった。しかし、一九九〇年代以降、綾辻行人を筆頭とする、いわゆる新本格ミステリのムーブメントの興隆とともに、密室の謎を扱う作品は飛躍的に増大した。二階堂黎人のように、ディクソン・カーにならって、密室の謎ばかりを主眼とする、日本版密室派の作家も出現している。

このように概観できる、ミステリジャンルにおける密室ものの流れにおいても、常に念頭におかれているのは、ポーの「モルグ街の殺人」という作品であり、ポーの書いた作品の射程と影響力の大きさには驚嘆せずにはいられないものがある。

## 恐怖、輪郭のデフォルメ

元山千歳

スペイン北部のアルタミラ洞窟の壁には、野牛、イノシシ、ウマ、シカなどがおもに赤と黒の彩色で生き生きと写実的に描かれている。

ジェームズ・トゥイチェル (James B. Twitchell) は、『恐怖の快楽—現代ホラーの解剖』(*Dreadful Pleasures: An Anatomy of Modern Horror*) において、フランス南西部のトゥルワ・フレール洞窟にアルタミラとほぼ同時期の13,000年前に描かれたとされる、「妖術師」(The Sorcerer) と呼ばれる壁画を問題にする。これはオオカミ、クマそして人間の混成体であり、角、蹄、牙などが奇怪に際だっているが、このような造形は人間の真実をあらわす、と言う。さらにトゥイチェルは、恐怖を経験させ、恐怖を倍加させ、恐怖の痺れにおいてわれわれの緊張を和らげさせることによって、自己を浄化させる、と記す(6)。

恐怖による浄化は、精神的である。浄化は、恐怖を生じさせるデフォルメを取り込むことによって生じる。デフォルメは、『監獄の誕生』を思い起こさせるが、フーコーは、精神は見えないのではなく、身体として実在する、と言う(33)。これにならうと「妖術師」は、身体としてのデフォルメであり、不安や恐怖という精神性であり、さらにそれは文化の歪みである。

というのも写実は、どの獲物を、どのようにして狩るか、というコミュニティの物語テキストを輪郭化するが、写実のデフォルメは、狩るべき獲物や狩の道筋を揺さぶるからである。つまりデフォルメ/モンスターは、身体として見えるわれわれの不安や恐怖、あるいはクリステヴァのいうアブジェクト (abject) —同一性や秩序、境界や配置を尊重しない精神 (Kristeva 4) —であり、文化というコミュニケーションの錯乱である。

文化についてここで詳述するゆとりはない。拙論「スーパースターの文化研究—ジョン・ウェインとアンジェリーナ・ジョリー」(京都外国語大学『研究論叢』LXXV [2010年]) や「物語テキストへの同一化と上演—英雄ジェシカ・リンチの生還」(『SELL』第27号 [2011年]) で論じたように、われわれは物語テキストのヒーローやヒロインに同一化し、文化においてこれを上演する。

われわれの身体は、同一化にあって、さまざまな物語とかかわるが、物語ヒーローやヒロインは何をするためにどこへ到達したかを知っている。しかしヒーローやヒロインは記号という不在でしかない。この不在という欠如をみとすために、われわれはヒーローやヒロインが到達した場を<眼差=欲望>し、そこへと進むことを上演しつづける。メディア文化において場へと身体を配置しつづける。上演論については、おもに吉見俊哉やアーヴィング・ゴッフマン (Erving Goffman) の理論をもとにしたが、文化とのかかわりについて、カシマ・ヨシヒサは、物語は、他者へと話され、だから交換というコミュニケーションにあって意味的に共有され、世代を越えて立ち起こり、欲望される到達点へと向かわせる「媒体」(Kashima 24) としてありつづけると

言う。つまり上演へと物語は動機付けする。

もはや自明のことだが、文化を〈身体・場所・テキスト〉へと構造化する力とは、欲望である。欲望は、ときに物語におけるプロットの推進力であり、それはときにメディア文化における権力あるいは反権力と見えるエネルギーあるいは力線である。

だとすれば、デュパンの推理にあつて、デュパンに同一化するわれわれは、さまざまなテキスト交錯のなかで、物語プロットの推進力という欲望の力線を進展させながら、その裂け目にレスパネー夫人と娘の惨殺を見る。

あきらかにわれわれはデュパンを取り込みながら、犯罪を犯した身体へと向かっている。この身体は、人間ではなくオランウータンだとすれば、推理は、身体としてのデフォルメへと進展していたことになる。

「モルグ街の殺人」(“The Murders in the Rue Morgue”)が発表された1840年代、いったい人々はどこを眼差していたのか。西へ西へと向かう身体、この身体の到達地はたとえば1853年の浦賀沖だったが、ともあれ西へと向かう身体を、輝ける未来の輪郭として欲望していたことを、もはや否定することは難しい。

1840年代にあつて、たいていのアメリカ人は、メイフラワー号はどこからやって来たかについて知っていたらう。102人のピューリタンたちをのせた帆船は、凶暴な海原を切るようにして進み、ピリグリムたちは荒涼たる原野にでくわし野蛮なインディアンと戦い、文明から見捨てられた原野を生きびたことを知っていたにちがいない。この者たちが、アメリカのフォアファーザーズだったことを、知っていたらう。

ちょうどそのころ原野を生きのびる荘厳な風景はアメリカとなり、原野はアメリカの聖地となり、やがて聖地は西部へと移動するが、アイデンティティの根源となった。

周知のように、プリマスは、北アメリカ植民地の地理的な起源ではない。ヴァージニアのジェームスタウンはすでに1607年には存在していた。しかしここが国の起源にならなかったのは、20人の黒人が年期契約労働者として売却された地であり、ポーハタンインディアンとの関係もうまく行っていなかったしプリマスの植民者たちとワンパノワグ族との平和協定は半世紀もつづいた―ピューリタンたちに比べると私利私欲が目立ったためだった。若い国家の起源としてプリマスが選ばれたのは、理にかなうことであつた (Deetz 11-15)。

すでにピリグリム神話は、東海岸に降り立った時から200年がすぎ、1820年までには確固たる位置を占めていた、とデーツ (James Deetz) は言う。1769年にはプリマスの若者たちによってオールド・コロニー・クラブ (Old Clony Club) が結成されていた。1819年にはピリグリム協会 (Pilgrim Society) が設立され、アメリカ最古の博物館であるピリグリム・ホール (Pilgrim Hall) 建設は課題の一つとなつていった。フォアファーザーズ、プリマス・ロック、サンクスギビングなどが構成するピリグリム神話、つまりアメリカの起源の物語は、パレードやお祭りなどさまざまな行事によって形あるものになつていった。

1855年にロンドンで原稿が発見されたブラッドフォード (Willilam Bradford) の『プリマス植民地について』(Of Plymouth Plantation) の完全版が1856年に刊行されたことはまったくの偶然ではないかも知れない。1859年、プリマスの町が全貌できる地に「清教徒上陸記念像」(National Monument to the Forefathers) が建設された。ポオが批判した国民的詩人H.W.ロングフェロー



(Henry Wadsworth Longfellow) が、ピリグリム・ファーザーズを讃える叙事詩を書いたのは1858年であった。

レスパネー夫人とその娘の惨殺は、アメリカの国づくり物語を上演することによってできあがった大都市の亀裂に見える暴力であり、この暴力にもしリアリティがあるとすればそれは、フロイトが夢の現実性について言うように、記憶の記憶へと隠蔽されつづけるアメリカの起源にかかわる現実だからである。

だからこそ物語テキストのプロットは、野獣捜しへと進展しなければならない。ブラッドフォードが記した出会いの現場、1620年11月15日の東海岸へと向かう。

いったいだニエル・ブーン (Daniel Boone) や、マイク・フィンク (Mike Fink) の眼差を、どれほどのアメリカ人が眼差しつづけることができたのだろう。1812年にはじまり15年に勝利した米英戦争の英雄アンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson) 将軍を讃える歌を、どれほどのアメリカ人が歌いつづけることができただろう。

「甕と振り子」(“The Pit and Pendulum,” 1842)、「赤死病の仮面」(“The Masque of the Red Death,” 1842)、「黒猫」(“The Black Cat,” 1843) は、「モルグ街の殺人」とほぼ同時期につくられているが、永遠の名探偵だと絶賛されるデュパンは、振り子の仕掛け人、壁を粉砕してなお現れる黒猫、仮面をまとう赤い死などの実像をどのように推理することができるのだろうか。やがてデュパンは「盗まれた手紙」(1844)をさいごに、ポオの物語世界から姿を消してしまうが、かつてジェラルド・ケネディ (J. Gerald Kennedy) は、探偵小説を棄てることによってポオは、何が一番大切かという問いへの答えをつかんだ、と言う。つまりポオにとっての問題は、コンセッティ姉妹が絶賛する進歩の申し子スミス将軍ではなく、将軍の身体としてのデフォルメだった。

1840年代、アメリカの起源づくりの国家的営為は、ポオにとってそれほどまでに人を煙りにまいてしまう粉飾と詐欺と惑乱にみちていたにちがいがなかった。

1844年、ポオはジェイムズ・R・ローウェル (James R. Lowell) 宛の手紙に、未来を渴望しながら現在のすべてを軽蔑していることを記した。

新たな国づくりを眼差して進んだ帆船メイフラワーは、やがて蒸気船や鉄道や駅馬車としてアメリカとその未来をメディア表象しつづけた。しかしそれは欲望という名の帆船であるかぎりにおいて、荒海や荒野に引かれる輪郭線上の裂け目に、オランウータンは、アメリカの起源にかわりつつ現前する。

起源の物語とは「回復不能な過去について単一で権威主義的な記述をすることによって、法の構築を歴史的に不可避なものに見せようとする語りの、戦略上の戦術なのである」(78) と言ったのはジュディス・バトラー (Judith Butler) である。

ポオはまるで生きながら葬られたマデラインの叫びを耳にする語り手のように、隠蔽記憶の奥から破壊的に現出する暴力的原風景を物語テキストにする。

そしてポオは、歯を抜かれてしまったベレニスはもちろん、レスパネー夫人と娘の身体がデフォルメされるとき悲鳴を耳にする登場人物たちを、未来を約束する進歩という輪郭に亀裂をいれる戦術として、上演しつづけたのではなかったか。

## 引用文献

- バトラー、ジュディス『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳。東京：青土社、1999。
- Clement, Richard. *Books on the Frontier: Print Culture in the American West 1763-1875*. Washington, D.C.: The Library of Congress, 2003.
- Deetz, James, et. all. *The Times of Their Lives: Life, Love, and Death in Plymouth Colony*. New York: Anchor Books, 2001.
- フーコー、ミシェル『監獄の誕生―監視と処罰』田村俣訳。東京：新潮社、1977。
- フロイト、ジークムント『フロイト著作集』第6巻。井村恒郎他訳、東京：人文書院、1970；1987。
- Goffman, Erving. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Anchor Books, 1959.
- ジュネット、ジェラルド『物語のディスコース―方法論の試み』。1972。花輪光他訳。東京：水声社、1985；1997。
- Kashima Yoshihisa. "Culture, Narrative, and Human Motivation." *Motivation and Culture*. Ed. Donald Munro, John F. Schumaker and Stuart C. Carr. New York: Routledge, 1997.
- Kennedy, J. Gerald. "The Limit of Reason: Poe's Deluded Detectives." *American Literature*, vol. 47., 1975.
- Kristeva, Julia. *Powers of Horror: An Essay on Abjection*. Trans. Leon S. Roudiez. NY: Columbia UP, 1982.
- Ostrom, John Ward, ed. *The Letters of Edgar Allan Poe*. 1948. New York: Gordian Press, 1966.
- プロウアー、S・S・『カリガリ博士の子どもたち―恐怖映画の世界』福間健二他訳。東京：晶文社、1983年。
- Rojek, Chris. *Cultural Studies*. UK: Polity Press, 2007.
- Twitchell, James B. *Dreadful Pleasures: An Anatomy of Modern Horror*. New York: Oxford UP, 1985.
- Wood, Robin. "Foreword: What Lies Beneath?" Steven Jay Schneider, ed. *Horror Film And Psychoanalysis*. New York: Cambridge UP, 2004.
- ウッド、ロビン「アメリカのホラー映画序説」藤原敏史訳。『[新]映画理論集成』岩本憲児他編。東京：フィルムアート社、1998。
- 吉見俊哉『都市のドラマトウロジー―東京・盛り場の社会史』。1987。東京：河出書房新社、2008。

## ポウの〈愛〉の19世紀——デュパンとボードレールの危機

林 康 次

### (序) 制御できぬ遊び空間としてのポウ文学へ

舗石の上で傷つく白鳥をうたったボードレールと舗道でつまづく語り手の姿から謎解決の道を説明したデュパン両者は、〈都市のアレゴリー〉のなかで、19世紀文学の危機からの回復を図った。その文学的行為は〈愛〉のかたちと深く結びついている。そこで、今回は、フランスの愛の不可能な詩とアメリカの不可能な愛のゆくえを「白鳥」(1859)と「モルグ街の殺人」の中に読み、ボードレールとポウの詩の方法と愛のかたちを19世紀の支配的な新聞文化の文脈のなかに捉え、ポウの〈愛〉を通した「結び語り」の成果としての「モルグ街の殺人」の意義を明らかにしたい。その際、問題になるのは犯罪都市と避雷針の関係のあり方であろう。その関係を流動の物語として作者は「結び、語った」わけであるから、この点に注意を払い、「金」の世界で変わらぬ〈愛〉によってアメリカの作り変への試みに迫っていく。ポウ文学は〈遊び〉の文学空間なのだ。

### (1) 下降の鎖と意識の芸術

「モルグ街」と同年の「悪魔に首を賭けるな」(1841)は、賭けの相手はエマソンではなく、悪魔こそその生と芸術を賭ける相手であることを表明した作品である。両作の呼応に示された、対エマソンのポウの鎖の行方の検討には、犯行現場に残された「金貨」と殺人の残虐性との対照に注意を払わねばならない。

オラン・ウータンの侵入と退散を許した、重要な手段は警察の眼には見えぬ避雷針付属の鎖だった。ボードレール「モルグ街」訳(1856)で明示されている「避雷針の鎖」を伝わってオラン・ウータンはレスパネー親子に近づくことができたのだ。ポウとボードレールの想像力には鎖は不可視のものではなかった。ここで、私たちは、「モルグ街」、翻訳「モルグ街」そして「白鳥」を通して、ポウとボードレールが、新聞文化の近代と対峙した両者が芸術の〈危機〉を意識している様を、〈愛〉のかたちを確認できる。

二人の芸術は大人世界と子供世界との間で構築された。両者の方向は、ウージェーヌ・シュエーの、その名を不動にした新聞小説『パリの秘密』(1842-43)の全能の社会主義のそれではなかった。プラツも認めているように、シュエー作品に見出される、宿命の女表象と人間主義的な社会改良の言説との亀裂はポウとボードレールには見当たらない。二人は存在の鎖をめぐる万物の〈照応〉の約束とその断念とを同比重に生き、書いた。それゆえの、19世紀の〈危機〉において、蛆虫としての自己意識と天邪鬼で世界の〈秘密〉に直面した二人が『パリの秘密』とは別の鎖を用意していた意義は強調されるべきだ。新聞における情報の封鎖と伝統への不参入に挑んだ「白

鳥」と「モルグ街」はルソー後のロマン主義を超え、ドストエフスキーの下降の鎖へと方向づけられているのである。

作為の都市に生まれ合わせた19世紀人ポウ／ボードレールの芸術の危機とその超克はパリ情景の物語の中に窺われる。文明の災害を及ぼす落雷を防ぐべく避雷針を設け、安住している大人の散文的社会にあって、死後、なお、同じ生を繰り返すことを揚言できる人々の間で、生のうちに〈死〉の幻想を主張しえた両者の流謫の芸術に私たちは同じ流謫の運命を嘆く弱者への〈愛〉を読むことができる。そこで、「白鳥」と「モルグ街」との接点、〈見世物〉という作品の性格に移ろう。見世物は両者の芸術の玩具性を意味する。玩具としての芸術では、エマソンの「法」ではなく、「賭け」が重要な要素となる。パリという文明の檻にあって遊び／賭けとしての芸術により檻の正体解明を両者はめざした。

## (2) 見世物としての芸術原理

デュパンの住居とモルグ街との距離の強調は、因果律の転倒により近さを強調している点重要である。「あの見すばらしい通りのひとつ」モルグ街という都市の外部は都市の支配層からは遠い、未開の、野蛮な地なのである。しかし、その「見すばらしさ」への〈愛〉を結ぶ者には近いのである。その点を含め、作者は作品内に「ないもの」と「あるもの」の価値観を導入し、さまざまな局面における真偽をデュパンに峻別させた。デュパンの分析力は社会から宇宙へと広がっていく。ボードレールは、デュパンを承けて、新旧のパリの対照のうちに、失われた都市の連鎖を宇宙大に記憶を通してうたった。こうした両者の流謫の物語は価値の不在の現前化をめざす芸術活動だった。その活動にとって〈見世物小屋〉は不可欠の設定であり、そこでは〈愛〉を通して都市と管理する文明の犠牲者が自己を再認識できるのである。

さらに注目すべきは、両者の見世物の語りは二重語りという点だろう。街モルグという命名は都市の住人には否定すべき死しか意味しない。そこでのレスパネー親子が見舞われた悲劇の証人たちは一義的な事実としてのスキャンダルを警察に報告する必要から登場する。殺人事件の核心は都市が排除した外部が文明を危機に陥れる可能性にあった。親子を襲うあるいは訪れるオラン・ウータンの暴力あるいは穏やかな意図／愛を同時に語った意図は「ないもの」と「あるもの」へのまなざしに由来する。

オラン・ウータンの怒りと暴力は野生と制御する「あの恐ろしい鞭」の記憶に発したものだ。二重語りの精神を体現するデュパンは現場で因果律の人々の言動を分析する。秩序回復のみを願う権力を笑いつつ、人間と都市が自ら招いた孤独から破局への運命を示唆し、その運命の元凶たる進歩の文明の虚偽と欺瞞を暴き、文明の冷酷に対する野生の側からの復讐のドラマは閉じられる。この「モルグ街」という〈見世物〉は、模倣に対する幻想の勝利はかくして幕となったわけである。

こうしたプロットを遂げる舞台が〈見世物小屋〉の構えを帯びていることにも都市の外部性排除の必然に対する芸術からの答えが窺えるのだ。そこは、都市文明が生きた驚異を提供し、それを娯楽化し、同時に野蛮を紀律へ封じこめた教訓とする場を逆手にとって、文明の娯楽と教訓の正体を暴露する場なのだ。アンドロマケーと白鳥という檻の中の生きものを配し、新旧パリを二

重映しにし、トロイアからパリへの都市の伝統連鎖を19世紀に惹起させるべく、中心的場としての見世物小屋が作品内で位置づけられている「白鳥」も「モルグ街」同様、二重語りによって、失われたもの同士を結んでいる。

ポウとボードレールの〈見世物小屋〉は、以上のように、文明の大人に対し野生の子供を主張するところにその眼目がある。「白鳥」での〈労働〉の「旋風」に対し、〈思い出〉の「角笛」を選択する詩人の「悪」と「無責任」が都市を糾弾するように、「モルグ街」でも、レスパネー母娘の家族の場、「古い」と「子供っぽさ」が野生と同質の価値を有し、彼女たちの住まいがオラン・ウータンと「親しい／家族のまなざし」を交換する共感の場であることを訴える。

そこにいつぞや、動物の見世物小屋が掛かっていた。／そこに私は見たのだ、ある朝、つめたく明るい／空の下で、〈労働〉が目を覚まし、道路清掃の車が／沈黙した空気の中に、陰鬱な旋風を起こす時刻、

檻から逃げ出して来た一羽の白鳥が、／水かきのついた足で、乾いた敷石をこすりながら、／でこぼこの地面の上に白い羽衣を引摺ってゆく姿。（「白鳥」阿部良雄訳）

避雷針は造作なくのぼれるし、船員なら尚更である。が、窓の高さまでのぼると、もうそれで先には行けない。窓は、左手の、かなり離れたところにある。彼に出来るのは精々身を伸ばして、部屋の内部を垣間見ることだけだった。そして一目見ると、恐怖のあまり、手を離して落ちんばかりであった。モルグ街の住民の夢を破ったあのすさまじい悲鳴が夜をつんざいたのは、この時である。マダム・レスパネーと娘は、寝衣を着て、前に述べた鉄の箱を部屋のまんなかに引き出し、そのなかの書類を整理していたらしい。箱は開いており、その中の品は箱の側の床の上においてあった。被害者たちは窓に背を向けて坐っていたにちがいない。獣の侵入から悲鳴があがるまでに経過した時間から考えると、おそらくすぐには気がつかなかっただろう。鎧戸のばたばたという音は、当然風のせいだと思われたのであろう。（「モルグ街の殺人」小川和夫訳）

### （3）ポウ／ボードレールの〈愛〉のかたち

ところで、「モルグ街」末尾での『新エロイズ』からの「ないもの」と「あるもの」を引用した作者の意図をどこに求めるべきであろうか。19世紀芸術の危機に際し、文学として幻想文学を補強する必要を痛感していたポウは同時代アメリカ演劇をルソーの〈愛〉の基盤である「あるもの」と「ないもの」からその是非を問うた。その演劇論と「盗まれた手紙」の重要なエピソード、デュバンが「金色」の「煙草入れ」を大邸宅に置き忘れてきたこととは密接な関連がある。更に、金色の煙草入れと街モルグの犯行現場に残された「金貨」や「黄金虫」（1843）の甲虫スカラベなどプロットを中心に位置していることは注意されるべきである。

ポウの見世物空間は黄金なるものを核に現実と異界が交通する場であり、その黄金なるものは意外の見世物のなかで正統の社会から異端へと筋を動かす呪物的なものとして機能を果たす。

かくて、呪物なる聖体を操る見世物興行師と批評家は手をつなぐ。幻想物語作者と批評家はポウの表と裏なのである。

批評「アメリカの演劇」において、ポウは、例の如く、「あるもの」と「ないもの」との分類の下、芸術評価を敢行した。その際、物語の展開の場合同様、プロットを現代の〈見世物〉としての資格の有無を問う。推理物語「モルグ街」が「19世紀の首都パリ」と「ボルネオ」とを結び、〈世界全体〉という舞台で恐怖の見世物を語り、「ちんば蛙」でそのクライマックスを遂げたとするなら「アメリカ演劇」はそうした見世物を根拠づける批評行為と言える。本批評は、「宇宙的家族」のヴィジョンの提出と共に、デュパン・シリーズを批評面から弁護するところに意義が見出せる。

ポウ／ボードレールはルソーによって開かれたロマン主義に意識を接木し、天邪鬼と分析力の芸術創造を管理の19世紀に潜む棄民の論理暴露へと推進した。それが二人の〈愛〉のかたちだった。「あるものを否定し、ないものを説明する」19世紀への嘲笑で閉じられる「モルグ街」と「私は思う、どこかの島に忘れられた水夫たちを、／囚れの者たち、敗残の者たちを！…そのほか多くの人々を！」と最後にうたう「白鳥」は時代の危機を文学で超える二人の創造性の生と芸術のあり方だった。

因果性に支配されぬ、制御されぬ遊び空間、〈愛〉による幻想の関係性を語るポウの物語にドストエフスキーが共感を示したのは、「むら気な作家」にボードレール同様、19世紀に分析力と天邪鬼で対峙するところにその本質を見出したからに他ならない。

「モルグ街の殺人」における〈愛〉の表出としての見世物の演出後、ポウの推理物語は深化し、やがてヴァレリーが感動した『ユリイカ』（1848）への完成へと近づいていく。デュパン三部作は繁文縟礼の管理を旨とする官僚社会に対し異界からの遊戯を伝える、賭けとしての見世物物語であるが、「モルグ街」はその有望な開始作と評価され続けるだろう。狂乱の群集の中で孤独な青年が「神々とだけ」関わる〈美しい必然〉なる「自然の法」を悟るに至る処生を説くエマソン世界は「因襲」というモルグを問題にしたが、ポウの〈モルグ〉は歴史に対し、遊び／見世物／愛をアメリカの制度の外、内面から提出することができた。

#### 引用・参考文献：

- Baudelaire, Charles. *Les Fleurs de Mal*, Éditions Garnier Frères, 1961. *Petits Poèmes en Prose (Le Spleen de Paris)*, 1980. *Edgar Poe Histories extraordinaires*, 1962. *Edgar Poe Nouvelles histoires extraordinaires*, 1961. 『ボードレール全集』（全6巻）阿部良雄訳、筑摩書房、1987年。
- Benjamin, W. 『ボードレール』（ヴァルター・ベンヤミン著作集6）、川村二郎他訳、晶文社、1975年。
- Bloom, H. *The Anxiety of Influence*, OUP, 1973.
- Chesterton, G.K. 『棒大な針小』（チェスタトン著作集4）、春秋社、1995年。
- Dostoevsky. ドストエフスキー 『地下生活者の手記』、米川正夫訳、新潮社、1955年。
- Emerson, R. W. *Emerson Essays and Lectures*, The Library of America, 1983.

- Johnson, Barbara. *The Critical Difference*, The Johns Hopkins UP, 1980.
- Jouve, P.J. ジューヴ 『ボードレールの墓』、道躰章弘訳、せりか書房、1976年。
- 栗本慎一郎 『経済人類学』、東洋経済新報社、1979年。
- Lovejoy, A.O. *The Great Chain of Being*, Harvard UP, 1936.
- 村田京子 『娼婦の肖像 ロマン主義的クルチザンヌの系譜』、新評論、2006年。
- 中川久定 『自伝の文学——ルソーとスタンダール——』、岩波書店、1979年。
- 小倉孝誠 『推理小説の源流 ガボリオからルブランへ』 淡交社、2002年。
- Poe, E.A. *Poe Poetry and Tales*, The Library of America, 1984. *Edgar Allan Poe's Works* (vols, XVI)、  
(ed.) J. A. Harrison, AMS Press Inc. N.Y. 1965. 「モルグ街の殺人事件」、佐々木直次郎、角  
川書店、1966年。『ポオ ボードレール』、筑摩書房、1973年。『ポオ小説全集』（4巻）、  
1974、東京創元社。
- Praz, Mario. *The Romantic Agony*, (tr.) Angus Davidson, OUP, 1970.
- Rousseau, J.J. 『新エロイーズ』（全集第9巻、10巻）、松本勤訳、白水社、1979年。
- Spitzer, Leo. *Essays on English and American Literature*, Gordian Press. N.Y. 1984.
- 高橋康也 『エクスタシーの系譜』、筑摩書房、1986年。
- Terdiman, R. *Present Past Modernity and the Memory Crisis*, Cornell UP, 1993.
- Valéry, Paul. 『我がファウスト』（全集第4巻）、佐藤正彰他訳、筑摩書房、1968年。
- 若林幹夫 『都市のアレゴリー』、INAX出版、1999年。
- Zola, E. 『金』（ゾラ・セレクション第7巻）、野村正人訳、藤原書店、2003年。

## 密室の謎とダゲレオタイプ

伊藤 詔子

### I ポーとダゲレオタイプ

「はじめに」でも述べたポーの視覚表象への関心は、鏡像、肖像画、近視、眼鏡、望遠鏡などのみならず、眼球の捉える像の描出現像を可能にしたルイ・ジャック・ダゲレオらによるダゲレオタイプ（銀板写真）にも向かっていった。ダゲレオタイプ発明（1839年8月）の翌年、新しい視覚テクノロジーのジャンルである探偵小説「モルグ街の殺人事件」（“The Murders in the Rue Morgue”）が誕生するに至った。この驚異的な発明の発表後、ポーは一早くフィラデルフィアの「アレキサンダー・ウィークリー」誌1840年1月15日号で、「銀板写真」（“The Daguerreotype”）と題する記事を書いた。

この装置は近代科学の最も重要で驚異的な発明と見なされることは間違いない。ダゲレオタイプと比べれば、どんな言語もおおよそ真実を伝え損ねているとしか言えない。しかもこの場合視点の源が描出者そのものであることを考えると驚異と言うほかない。実際ダゲレオタイプは無限の（この語の真の意味で）まさしく無限の正確さにおいて、人間の手によるいかなる絵画よりもその再現性で秀でているのだ。もし我々が強力な拡大鏡で通常の絵画を仔細に眺めたとすれば、自然に似せて描かれたすべての線は消え去ってしまうだろう。しかし銀板写真素描を厳密に精査すれば、より絶対の真実のみを開示し、再現された事物の姿のより完全なる現実との同一性を示すのである。（Poe “The Daguerreotype,” Brigham 22-23）

このようにポーはダゲレオタイプが比類なき正確さで、人間の手になる如何なる描写よりも、対象の優れた再現を行うとしてこの技術の革新性を見抜いた。また写真の語源が「ギリシャ語の太陽の画描である」とも述べ注目している。ポーを魅了したのは、絵画や手描きの図像とダゲレオタイプの絶対的な表象性の差異であり、こうした認識は30年代のポーの風景と、「モルグ街の殺人事件」以降に見られる作品の手触りの劇的変化と関係していると思われる。

またポーはダゲレオタイプがアメリカに入ってきた1840年以降何度か撮影のためスタジオに足を運んでいて、並々ならぬ興味をしめしている。内田市五郎やバートン・ポーリン（Burton R. Pollin）の研究によると、このうちポーのダゲレオタイプ肖像画は全部で6種類も残っている。『ポー・ログ』（*The Poe Log*）によると多忙な亡くなる年には有名なブレイディのスタジオでも撮影している。ポーは一種のダゲレオ・マニアであったともいえよう。興味深いのは1848年11月13日撮影された「ホイットマン・ダゲレオタイプ」（プロヴィデンスにあるブラウン大学図



書館蔵)「プラット」(Pratt)及び「ウルティマ・テューレ」(Ultima Thule)ダゲレオタイプにも、よく知られている原版と、左右逆になる現像分二種が残っていることだ。同じ被写体の胸像が全く違う印象を持つ二つの像に分裂複製され、しかも二つとも〈真実〉であることは、ダゲレオタイプの表象作用にはダブルを生み出す認識論的プロセスが比喩されていることになり、ダブルに深い関心を持っていたポーにとって、このメディアがもつ魅力的かつ魔術的な事実であったにちがいない。晩年にこのモチーフは、「楕円形の肖像」や「ウィリアム・ウィルソン」の二重人格の構想ともなっていたと仮定できる。

さてダゲレオタイプ等大衆複製技術の普及と共に、ベンヤミン(Walter Benjamin)の言葉を借りると「個人の痕跡が消える」のみならず、その身体もばらばらに切断される写真的映像を組み込むジャンルである探偵小説が生まれた。この誕生を可能にしたものが、小説の中の〈目〉ともいべき探偵(“private eye”)の視覚の登場であった。デュパンとは、徹底して視覚の場で形成されたポー文学の中で、周到に構築された特別な視力、つまり光源がすなわち画描者である万能の視力(“all-seeing eye”)、まさに写真的視覚の獲得を意味するものに他ならなかった。ポーが描く風景の変化は、それまで落日後暗闇のうちに進行したストーリーを、初めて太陽光線による作品展開に変えていることとも関係する。

殺人事件そのものは「明け方3時頃発生し」デュパンが現場の調査に出かけるのは「午後遅くなって」から陽のあるうちであり、「夕闇の帳降りる頃」から始まる「アッシャー館の崩壊」や、太陽光線を遮断して人工的カエドロスコープ空間を演出する「赤死病仮面」などと「モルグ街の殺人事件」とでは、光源の変化が見られる。ただし「盗まれた手紙」や「マリー・ロージェの謎」でデュパンがつけるサングラス「緑の眼鏡」は、日のあるうちに展開するストーリーのなかで、依然として太陽光線を遮る、推理するデュパンの視覚技術の特異性を表象することになる。

## Ⅱ 絵画から銀板写真、アッシャーからデュパンへ

ポーにとって絵画と銀板写真、この二つの手法の差異は、例えば「アッシャー館の崩壊」の冒頭に典型的に見られるように(余りに有名なので引用は省略する)、魂の画布となるページに描出された館の絵画像と、ガゼット紙の記事として呈示されるレスパネー親子の惨殺死体の客観的な銀板写真的記述を比較すれば歴然となる。「体にはまだじゅうぶん暖かみが残っていた。死体を調べてみると、たくさんの擦過傷が顔にはひどい搔き傷がいっぱいあり、喉にも黒ずんだ打撲傷と、故人が絞殺されたことを示す指の爪痕があった。」(“The Murders in the Rue Morgue,” M II, 538)

「アッシャー館」の語り手の目にヴィジヨナリーに浮かび上がる風景は、絵画としての世界幻出であった。一方ガゼット紙の死体描写は、ポーのいうダゲレオタイプが表象する「現実の鏡像」であり、テキストは磨かれたダゲレオ板として置かれている。そしてこの鏡像は新聞記事として一見誰の目にも同じに見えるが、デュパンの目という拡大鏡によって、鏡像の細部と奥が読み込まれるにつれ、前頁の引用「より絶対の」真実を映し出す像へと変貌していくのである。「1本の釘に見える、頭のところがぼろりととれる釘」や、「フェラード様式の鎧戸が半開きになって」いること、そして鎧戸が「避雷針まで2フィート以内の距離にまで」押し開けられうること

等、鏡像の奥に隠された立体的な真実が次々に明かされていく。デュパンによる鏡像の〈真実〉啓示のプロセスは、他ならぬ死体が置かれていた〈密室〉に、デュパンの想像力という視力、余人には不可能な視力が、稲妻のように密室に侵入するプロセスに他ならない。この視覚が「モルグ街の殺人事件」以降に見られる新聞記事の死体描写に見られるような、風景の劇的変化を生み出したものだった。

### Ⅲ 密室の謎

一方この作品のもっとも革新的な創造とされたのはいうまでもなく密室であったが、モルグ街のレスパネー母娘の部屋は、実は密室ではなく窓が自由に開閉できた。窓からの超自然的存在の侵入は、ポー作品のオブセッションで多くの作品のモチーフであり、筆者はそれを“Gothic Windows in Poe”と呼んで考察した。大鴉はドアでなく窓から入ってきたし、黒猫プルートの吊り下げられた死体は窓から投げ入れられた。兄、アッシャーは嵐の夜、こともあろうに窓を開け放ち、閉鎖されて久しい屋敷に突風を吹き込ませて、結果的に妹、マドリーンの墓からの舞い戻りを促してしまう。窓は実にポーのストーリーでは、いったん開くと怪異が侵入し、テキストをゴシック空間に変じる重要な経路となってきた。

しかしレスパネー母娘の部屋に侵入したのは、40年代までのポーを圧倒してきた超自然的侵入者ではなく、自然そのものといえるボルネオの森からの、自然からの使者ともいべきオランウータンであった。実際ポーがいかにも「モルグ街」で窓に執着したかは、テキストにwindow(s)が28回繰り返されることからわかるが、その窓もまたこの作品ではこれまでとは変質している。落雷を避けて電気を建物の外に導くはずのフランクリン発明の避雷針を伝わって、巨大な生き物が建物内、それも女性2人の部屋の中に飛び込むというからくりには、フランクリンの理神論や合理主義をあざ笑う、自然の脅威の再導入とも呼べる構図がある。窓によって隔てられた内と外、文化と自然、美女と野獣は攪乱されて渾然一体となり、女性の身体は物のように窓から外に投げ捨てられ、ばらばらの物体となって、路上の完全な観察の対象と化するのである。

### Ⅳ ポー作品の窓

窓の重要性は、あらかじめデュパンにとっては、「自分にとってたいいの人間は胸に窓を開けているようなものだ」と予告されていた。モルグ街4階のレスパネー親子の部屋の窓は、部屋の内部の住人がそこから投げ落とされ、レスパネーの頭部切断死体の鏡像を展開させるものとして、内部と外部のしきりを文字通り無意味に転じ、内部が外部化され外部が内部化され一つになる契機となっている。デュパンが浮かび上がらせる拡大鏡による〈真実〉の現前とは、銀板写真が表象する「再現された事物の姿のより完全なる現実との同一性」構築ということができらるだろう。銀板写真が表象する新聞記事の奥には、恐怖のシーンが内在していた。閉じているはずの窓がバネ仕掛けにより押し開けられ、水夫により半ばペット化された野生のオランウータンという二重に混沌とした外部世界が、稲妻のように避雷針から飛び移り個の空間に突入し、剃刀が振り回される。このストーリーを辿り直すデュパンの視力もまた、稲妻のように部屋の内部に侵入

し、犯罪記事の読者のために恐怖を読解し、印刷し読者群衆へと外部化する機能を果たす。

ヴィクトリア朝と視覚的想像力についての著作の中でロナルド・トマス (Ronald Thomas) は、写真が、特にこれまで室内に秘匿されてきた女性の身体を可視的に暴き、その死体に情け容赦なく焦点を当てることで、人間の身体を、それを読む専門家にコントロールされる〈読むべきテキスト〉に変じたと卓見を述べている (Thomas 152-3)。銀板写真がこうして世界を視る新しい技術を生み出したように、デュパンの視力は多文化化していく19世紀アメリカの自然と文明の不明の混沌と無秩序の表象を、新しいジャンルへと焦点化する。それはまさに時間と空間を自由に飛翔するポストモダンの様式であり、ローゼンタールはそれをインターネット的想像力と評している。

## V 魔術としてのダゲレオタイプ

ところで「アレキサンダー・ウィークリー」誌1840年1月15日号には、「銀板写真」と同時に「謎とき」(“Enigmatic”)と題する、読者への半年に及ぶポーの暗号解読サービス連載物も掲載されていた。このことは、ポーにとって銀板写真の持つもう一つの意味も語っていないだろうか。暗号はポーにとって解読可能でも読者にとっては謎であった。つまり銀版写真は、カーボナイトと石灰とヨウ素等の化学作用を利用して開発されたものであるが、その化学物質と太陽の作用を司るプロセスは、一つの図像から「絶対的の真実」を浮かび上がらせる一種の不思議この上ない魔術としての機能も併せ持っていた。つまり銀板写真は絵画のように人間の思想から内面的に描出されるのではなく、被写体に太陽光線が当たり銀版に浮かび出る、いわば「光による肖像画」であり、従ってそれは「再現された物の姿の真のアイデンティティ」に到達する新奇な表象性を持つとの認識である。ポーは銀板写真が「光の作用で、考えられ得る最もデリケートな画布に」(the action of the light, of the most delicate texture conceivable) 実現する表象装置であることに注目した。トラクテンバーグ (Allan Trachtenburg) も指摘するように、銀板写真による表象結果は比類なく革新的であると共に、ある意味では鉛に妖銀を吹き付けた銀版に像が浮かぶのを待つ、錬金術的魔術性をも内在させてもいたのである。

このように見てくるとポーにとってダゲレオタイプが持っていた重要性は、第一にこの最新の観察と映像複製機械のレンズが、既に述べたように肉眼の見逃す被写体の「完全なアイデンティティ」を見透す力にあったが、そうした真実性とは裏腹の第二の魔術的特性にもあったと思われる。それは銀板写真が眼を光学化したレンズという視野枠を持つことで、描かれる像は被写体の完全なアイデンティティとなるとともに、その銀版という枠のなかに「どこから見るか」「どのように構図するか」について、対象の再定義化という絵画と同質の芸術性を深く内在させていたことも重要である。構成力こそ芸術の本質だと考えたポーにとって、ダゲレオタイプのこの第二の特質は最も心惹かれる点であり、既にこの点は、「群衆の人」に予示されていたのである。

### Works Cited and Consulted

- Brigham, Clarence S., *Edgar Allan Poe's Contributions to Alexander's Weekly Messenger*. Worcester: American Antiquarian Society, 1943. pp. 20-23.
- Itoh, Shoko. "Gothic Windows in Poe." Forthcoming in *Poe's Pervasive Influence*. Philadelphia, PA: Lehigh UP, 2011.
- Poe, Edgar Allan. *Collected Works of Edgar Allan Poe* Vol. I, II, III. Ed. Thomas Olive Mabbott. Cambridge: Harvard UP, 1969-1978.
- Thomas, R. Donald. "Making Darkness Visible," *Victorian Literature and the Victorian Visual Imagination*. Ed. Carol T. Christ & John O. Jordan, Berkley: U of California P, 1995.
- Trachtenburg, Allan. *Reading American Photographs: Images as History; Mathew Brady to Walker Evans*. New York: Hill and Wang, 1989.

## 欧米言語文化学会 編

## 『実像への挑戦——英米文学研究』

(音羽書房鶴見書店、2009年6月、260頁、本体2,500円+税)

藤江啓子

本書は『ふぉーちゅん』同人として発足した研究会の20周年記念論文集である。2008年に20周年を迎えた会は、今後《欧米言語文化学会》と名を改め活動していくことになるという。そこでこの新しい研究会名が編集者として掲げられているわけである。植月恵一郎氏の「あとがき」によると、実際には10数名の会員が編集に当たられたということである。同じく「あとがき」によると、本書のテーマは《円熟》であり、タイトルは井内雄四郎氏の巻頭の言葉「英文学の実像に迫る」から取られたものであるという。このような本書に関する基本的な情報が「あとがき」までわからないのは残念である。先達の師による巻頭言に加え、編集責任者による説明がはじめにあったほうがよいのではないか。また、氏自身、「テーマ的には分散した感は免れない」と認めているとおり、テーマに沿った論文集であるとは言い難い。各作家の円熟期の作品を扱えばよいとのことでもあり、なるほど各論はそれぞれの作家の代表作と目されるものが論じられている。これだけ分野の違う会員の論文を一つのテーマでまとめ上げるのは困難なのはわかるが、もう少し打ち出すものが欲しい。英米にわたる論文15編が年代順に並べられているが、せめてなんらかの分類が成されるべきであった。典拠明記（注や引用文献、参考文献）の方法もまちまちである。全体的な統一が望まれる。各論文の簡単な紹介が最初にあってもよかった。そこで、以下、各論を見ていきたい。

古河美貴子の1.「王党派詩人としての役割——ロバート・ヘリックのアングリカニズム——」は、ヘリックを田園風景を歌う叙情詩人とする従来の評価に対し、代表作『ヘスペリディース』に宗教的、政治的メッセージを読み取る。王党派詩人であり英国国教会の牧師でもあるヘリックが国教会（アングリカニズム）を支持する立場を取り、ピューリタンに反駁していることを論じる。真のレントを守ることについての見解、あるいは、中庸を重んじる精神や民衆娯楽の受容によって、時として峻厳で極端に走るピューリタンを批判したとする。堀切大史の2.「E・A・ポーの『アモンティラードの酒樽』を恐怖小説として読む」は、象徴とアイロニーに注目する。復讐劇によく見られる勧善懲悪という教訓をこの小説から読み取らず、残忍な方法で復讐をするモントレソーが理知的な「善人」から「悪人」に変貌する様に、人間の心の怖さをこの小説は物語るとする。地下墓地をモントレソーの意識の象徴と捉え、フォーチュナートを彼の分身とする。人間の心の謎、「わからない」ということが、この作品を恐怖小説にしていると論じる。

高橋愛の3.「トンモとは何者か——『タイピー』における自己の再構築——」は、メルヴィルの第一作である『タイピー』は単なる記録ではなく、思弁性や複雑性ゆえに円熟の端緒となっているという。西洋近代社会の枠組みから語り手が逸脱する様を、トンモという非西洋的な名前の受容に見る。入れ墨を入れることを拒否したトンモは結局は西洋へ回帰したとは言い難く、むしろ

る放浪の旅が始まったと考えるべきだと主張する。特定の言語システムや言説に囚われない自己の再構築に乗り出した男、それがトンモとは何者かの答えであるとする。内堀菜保子による4.「ナサニエル・ホーソーン作品における〈フェア・マン〉と身体表象」は、従来女性の登場人物を対照的に捉える〈フェア〉と〈ダーク〉という軸を男性に向ける。デイズデイルにはフェアな身体描写がなされ、彼は「見られる」男である。チリングワースは対照的にダークとして描写され、「見る」男である。この二人の男の関係はホモエロティックな欲望を露呈していると論じる。ユニークな好論である。

西山里枝の5.「『ブライズデイル・ロマンス』における生と死——ホーソーンの小説の核心に迫る——」は、「想像的なもの」と「現実のもの」が交錯する「中間の領域」をホーソーンの小説が構築される場とし、二元的対比、とりわけ「生と死」に着目する。ブライズデイルを牧歌的アルカディアと捉え、ゼノビアに近づく死、カヴァデイルが経験するある種の死にその崩壊の原因をさぐる。誤植があるのが残念。吉田一穂の6.「『二都物語』——歴史的テーマと個人の生と死——」は、作品における歴史的テーマであるフランス革命にディケンズがいかに個人の生と死を調和させて描いたかを論じる。さらに、革命における民衆のカニバリズムとキリスト教の生体拝受にみられるカニバリズムの調和を指摘する。民衆のカニバリズムにさらされたダーネイを、身代わりとなって救うカートンの自己犠牲の行為は、十字架上のキリストと重ね合わせて考えることが出来、カートンは民衆の犠牲になることによって永遠の生命を得たとする。

水野隆之による7.「『我らが共通の友』における相互関係の再生」は、同じくディケンズの長編『我らが共通の友』を論じたものである。上流階級のユージン・レイバーンと下層階級のリジー・ヘクサムによる階級差を越えた結婚により、対等な立場を前提とする相互関係がいかに再構築されたかを考察する。ロックスミス／ハーモンの「共通の友」としての役割や、上流社会批判が論じられる。閑田朋子の8.「ジョン・アッシュワースによる民衆教育の試み——日曜学校についてのケース・スタディ——」は、イギリスの民衆教育家であり作家であったジョン・アッシュワースの『つつましい暮らしの不思議な話』を主たる史料として、19世紀初頭から中頃までの労働者階級の文化における日曜学校の意味の変化・発展を考察する。それは、ミドルクラス・ブルジョワジーによるソーシャル・コントロールの手段から、権利としての教育、労働者文化内部のリスpekタビリティへの変化であることを指摘する。例えば、日曜学校に良い身なりで出席することは、ミドルクラスの価値観を志向するというよりは、労働者自身の自尊心であり、労働者文化の生活倫理の中で再構築されたものであると論じる。

中村善雄の9.「接合／分節と蒐集の力学——ヘンリー・ジェームズの『黄金の盃』論——」は、接合／分節というダイナミズムとその結果としての移動を、ユダヤ人骨董商やイタリア人アメリカンに見る。「ダーク」と表象され、偽のアメリカ発見者アメリカン・ヴェスプッチの名を継承するアメリカンや、ヴァーヴァーにひびの入った黄金の盃を売りつけるユダヤ人骨董商に、人種の異種混交やディアスポラ・アイデンティティを読み込む。それは滑らかな表面とは裏腹に亀裂のある黄金の盃が象徴するとする力作。横山孝一の10.「ラフカディオ・ハーンの『雪女』ができるまで——夢の中の母——」は『怪談』に収録された「雪女」の自伝的意義を明らかにする。「文学における超自然の価値」では、4才のときに別れ、生涯会うことのなかった母ローザを理想化し、カトリックの聖母崇敬と重ね合わせる。「和解」の主人公は顔のない、のっぺらぼうの

女の悪夢に悩まされる。理想化された母の夢とのっぺらぼうの悪夢の両方から解放され、ハーンはずっと忘れていた怒った母の顔を「雪女」として作品化したと論じる。

松山博樹による11.「ジョイスの『円熟』——青春と老い——」は、「円熟」のテーマに取り組み、『若い芸術家の肖像』におけるスティーヴンの精神の成長を、家庭、学校、社会からの距離感、優越感や劣等感、孤独感にたどる。青春時代にすでに冷静に、そして客観的に学校や社会を見つめ、分析し、老いを感じていたスティーヴンと、スティーヴンに彼の人生を投影したジョイスに「円熟」を読み取る。木ノ内敏久の12.「ジェイムズ・ジョイスと絵画——モダニズムの認識論的考察——」はモダニズムという新しい芸術運動において、ジョイスの文学と印象派やキュビズムといった絵画の認識論上の相同性を考察する。文学における伝統的な「全知の語り手」から「意識の流れ」と呼ばれる手法への変化を空間・時間のとらえ方の変化とし、そこに絵画的イメージを読み取る。時間芸術と空間芸術というしばしば分けて考えられるものをジョイスは統合的に表現しようとしたとする。

奥井裕の13.「孤独と無常の悲しみ——マンスフィールドの『カナリア』について——」は、ニュージーランド出身の女流作家、キャサリン・マンスフィールドの「カナリア」を「生あるものは愛する対象を求めずにはいられない」という作品の基本的主題のもとに読み解く。孤独な老女がカナリアに愛の絆を求めるが、カナリアの死により「無常の悲しみ」を感じる。それは意識の流れ、あるいは内的独白という創作技法によってより効果的に読者に伝えられると論じる。植月恵一郎の14.「森のロレンス——『チャタレー夫人の恋人』の性とエコロジー」は、D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』において、〈性〉によってエコロジーが維持されていることを論じる。人間の男女の性交渉に限らず、雌雄の健全な交わりや精神性が生態系の維持には必要だとする。また、『チャタレー』を牧歌と解する多くの批評家に反論し、農耕詩に近いとする。

近藤直樹による15.「『1984年』——ウィンストンの敗北の意義——」はジョージ・オーウェルの最後の小説『1984年』を取り扱う。オセアニア国における独裁体制が全体主義への恐怖を実感させ、党に抗うウィンストンの敗北・死に多くの批評家が絶望を読み取るのに対し、氏は「人間」の可能性や希望を見出す。それは全体主義の根幹にあり、オブライエンに体现される「超人」志向と鋭く対峙するものであり、「超人」志向こそが希望のない全体主義を生み出すと論じる。

総じて、地道な研究会の20年の歩みを記念した本という印象である。しかし、ジェンダーや環境、ポストコロニアリズムなどを射程に入れた新しいアプローチを試みた論文や、従来の解釈に挑戦し、新説を試みる論文も多く見られた。斬新な試みや意欲的な試みゆえに、論旨に明晰さを欠き、論じきっていないものもある。会の名称も新たになったことでもあり、今後の活動に期待し、会の発展をお祈り申し上げる。

前田一平 著

『若きヘミングウェイ—生と性の模索』

(南雲堂、2009年10月、430pp、本体4,000円+税)

本 莊 忠 大

本書は「あとがき」にもあるとおり、前田氏が2008年3月に広島大学大学院文学研究科より学位を授与された博士論文がもとになっており、「序論」に続き「描かれなかった故郷の町—イリノイ州オークパーク」、「未熟という魅力—戦後のアメリカ修業期」、「幻想と傷を探る—短編小説と郷愁のミシガン」、「『男らしさ』の揺らぎ—長編小説と女たち」という全4部12章および「終章」から構成されている。これらの章は、前田氏自身が指摘するように、主に1980年代以降を指す「ヘミングウェイ再考の時期においても特に光が当てられることも再考されることもなかったヘミングウェイのアメリカ時代を」（著者はこの「アメリカ時代」をヘミングウェイが1921年12月に最初の妻ハドレーを伴ってパリに渡るまでの時期として特定している）「作家ヘミングウェイの形成という視点から検証」し、「『日はまた昇る』と『武器よさらば』を作家ヘミングウェイの形成の到達点として」（35）再読した研究大成であり、広範に文献を渉猟し、豊かな知識をもとに鋭い視点でテキスト分析を緻密に行うことにより、新たなヘミングウェイ像を浮き彫りにするのみならず、今後のヘミングウェイ研究の方向性を開拓した啓発的な研究書である。

ここで各章の内容を概観してみたい。「序論」では主に、ヘミングウェイ研究において定着していた男性中心的な「マッチョ」像がジェンダーおよびセクシュアリティの視点から読み直され変容してきた様相と、人種と植民地主義などへの批評の広がりなど今後の展望も含めてヘミングウェイ研究の変遷がわかりやすく提示されている。続く第1章で、前田氏は研究者によって等閑視される傾向にあったオークパークの歴史的背景を自らが行った現地でのリサーチを基に詳細に紹介している。ここで注目すべきは、ただ単なるオークパークの歴史の概観に終わるのではなく、これまで批評家たちによって構築されてきたオークパーク観がいかに歪曲されたものであったかを実証的に提示している点であり、ヘミングウェイ研究における重要な成果としても位置づけられる。

続く第2章においては、従来の伝記研究においてヘミングウェイの少年時代がいかに虚構に彩られたものとして紹介されてきたかという点が浮き彫りにされ、一方でニック・アダムズ、ジュエイク・バーンズ、フレデリック・ヘンリーが、オークパークを出自としていることを見事に実証している。その上で本書において何度か繰り返されることになるが、ヘミングウェイはこのような登場人物たちがオークパークの『外』の世界の様々な暴力に遭遇するときの衝撃」（87）を描いたのだと説き、この点是以降に続くいくつかの章においても論証されている。

第3章では学校文芸誌『タビュラ』に掲載されたヘミングウェイの作品を丁寧分析し、そこにリング・ラードナーの影響や「既にハイスクール時代に『外』の世界の暴力を好んで描いていた」（89）点を読み取り、文体や「オープン・エンディング」などの技法をもとに、当時のヘミングウェイ



イが『キャンザス・シティ・スター』社の文体心得を待たずとも、小説の文体と技法に関して作家ヘミングウェイになる基本的素養を有していたと考えてよかろう」(103)と喝破する。こうして著者は従来考えられていたヘミングウェイの伝記的背景にまつわる定説を説得力ある形で修正している。

Ⅱ部第4章では、主にヘミングウェイ自身が書いた手紙をもとに、彼が結婚の約束までしたミラノのアメリカ赤十字病院の看護婦だったアグネスが「帰還して間もない若きヘミングウェイに、作家としての人生を急がせる人物でもあった」(108)という興味深い伝記的背景を解明している。そして1919年1月から1921年12月までの間に書かれたと考えられている作品を取り上げて丁寧分析し、そこから推測される当時のヘミングウェイ像を浮き彫りにしている。またケネディ図書館に収蔵された「北ミシガンにて」の原稿に施された加筆や修正を詳細に吟味することによって執筆開始時期をパリで修業時代を送る前だったと特定し、ヘミングウェイの創作意識の変化を読み取っている。一方でヘミングウェイがガートルード・スタインに出会う前に反復の技法を身につけていた点を論証することによって、ここでも修業時代に関する重要な定説を修正することに成功している。

第5章で前田氏はシャーウッド・アンダソンが説く「新しい散漫さ」に着目し、O・ヘンリーが描いた明確なプロットとは違うジョージ・ウィラードの成長物語を『『散漫』でサブ・プロットの描かれた成長」(153)と捉えて、そこに『ワインズバーグ・オハイオ』の独自性を読み取っている。その一方でアンダソンにとっての新しい「男性性」意識、即ち「生産労働と利潤追求に携わり、芸術活動を『女性的』と規定して抑圧する男たちの『男性性』のアンチテーゼ」(157)が表象されている点を読み取る。そして「ジョージの成長は作家となるべき資質を身につける過程であると同時に、新しいジェンダー意識に目覚める過程として描かれている」(162)と分析し、この作品に見られる性の多様性もまた『われらの時代に』の創作に影響を与えている点を論証している。

その一方でⅢ部第6章は、アンダソンに創作上の影響を受けた『われらの時代に』において、ニックの成長がどのように描かれているかを緻密に分析することにより、どの点にヘミングウェイの独自性が認められるかについて考察した章である。それも従来の批評を踏まえてテキストを詳細に分析することにより、圧倒的な「暴力」に遭遇したニックの反応が、「必ずしも『精神的成長』には発展せず、むしろ幻想という形をとり、いわば負の座標面に成長の放物線を描いているように思われる」(172)と鋭く見抜いている。

また第7章では、「ふたつの心臓のある大きな川」と原稿の段階でこの作品の結末部を構成していたと考えられている「創作について」を、伝記的背景を援用しながら比較検証する論が展開され、ヘミングウェイが「自己の経験を素材にする極めて自伝的な創作を企図し、自己と自己のペルソナとの峻別、自己の経験と虚構化された経験との峻別、そしてその難しさに極めて自意識的な作家であったことがうかがえる」(212)と指摘する著者の批評眼はここでも鋭い。そして「ふたつの心臓のある大きな川」の結末部に描かれる「沼地」が表象する不安を具体的に説得力ある形で提示している点も、ヘミングウェイ研究においては重要な成果であると言える。

続く第8章では「インディアン・キャンプ」と原稿の段階で削除された前半部「三発の銃声」において異人種混交に対する恐怖が隠蔽されたことのみならず、それは不眠症やトラウマといっ

たニックの恐怖の源に接続されることを論証している。またこの章でさらに明らかにされる重要な点は、「身を横たえて」をテキストに基づいて「両親の対立を母の破壊性と父の屈辱として感じた少年期の原体験、そして母に抵抗できない父の屈辱を精神的去勢として共有する男性ニックのトラウマの物語」(244-45)として結論付けた点であり、その上で創造されたミシガンが「郷愁だけではなく人種と性に彩られ、トラウマの原体験たる最も古い傷をたどる場でもある」(254)とし、そこに作家ヘミングウェイの成長を見て取った点である。

続くIV部では、まず「暴力との遭遇や暴力による傷をひきずる主人公の姿が描かれる」『日はまた昇る』および『武器よさらば』が、「もし暴力と呼べるなら」という前提の上で、「ジェンダーとセクシュアリティの揺らぎという『暴力』に接触するミドル・クラス出身のアメリカ青年の物語」(261)として紹介される。そして第9章において、『日はまた昇る』の原稿の段階で削除された「序文」をもとに、ジェンダーおよびセクシュアリティの観点からこの作品を再読し、「ジェイクが語るのは個人的過ちの物語ではなく、時代そのものが彼の世代を支えないという時代認識の物語」(288)として新たな解釈を提示して、「すべては既に起こってしまっている」世代の独自性を読み解いている。

第10章では、『武器よさらば』を「ヘミングウェイが修業時代に実質的に終止符を打つことになる作品」(292)として位置づけ、従来の作品解釈に大転換を迫ったジュディス・フェッター、ジョイス・ウェックスラー、サンドラ・ウィップル・スパニアーによる論文が紹介される。続く「キャサリン・パークレーの死体検証」と題された第11章は、52ページにも及ぶ長大な論考であるが、テキストに基づいた実に手堅い『武器よさらば』論が展開されており、評者が最も興味深く読めた章でもある。その内容はこれまで批評家たちがあまり注目してこなかった、あるいは不自然な点として避けてきたと考えられる何気ない会話におけるセリフなどテキストの詳細な部分を緻密に分析し、演技されたキャサリンの物語に彼女の両性具有的な欲望を読み解いたものである。

第12章では、『武器よさらば』のキャサリンに見られる両性具有願望が『エデンの園』のキャサリンに引き継がれていることに、ヘミングウェイの妻ハドレーが寄与している点が説得力を持って実証される。そして登場人物たちが遭遇する「暴力のひとつである性の多様性」(378)が、ヘミングウェイ文学の底流に潜む新たな側面であることを説いている。そして「終章」では、オークパークの現在についてヘミングウェイとの関わりの中で紹介され、著者の研究の動機づけになったマイケル・レノルズによる論とともに結ばれている。

本書を読み終えた後、評者は第12章で展開されている『武器よさらば』および『エデンの園』に登場するキャサリンを巡る議論のように、「作家ヘミングウェイの形成」(35)に至るまでの作品がその後の作品とどのような有機的関連性を持っているのかについて、その他の作品からもさらに詳細に検証してみたい気持ちにも駆られた。本書は特定の批評理論に極端に偏ることはなく、その一方で強引に自論をテキスト解釈に当てはめた論考でもない。先行研究への細やかな目配りとテキストに基づいた堅実な分析によってこれまでのヘミングウェイ研究におけるいくつかの定説を覆し、十分な説得力を持つ新たな解釈を導き出すことに成功している。その鮮やかな手法には並々ならぬものを感じた。ヘミングウェイが地位と名声を確立するに至る時期について、さらにはヘミングウェイ文学全体を理解するための必読書である。

林 康 次

田中久男 監修 亀井俊介・平石貴樹 編著

『アメリカ文学のニュー・フロンティア』

(南雲堂、2009年10月、360pp、本体3,800円+税)

林 康 次

### (序) アメリカ文学の400年へ

ピンチョンやデリーロのシステム小説を読みながら、ハイパーリアリティのアメリカに至った、近代から現代への展望を常に持つことが私たちには必要ではなからうか。その格好の書物が本書『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』であろう。読者は本書から各時代の作家とアメリカとの真剣なかかわりを学ぶことができる。

本書の立場は、「はしがき」の田中久男によれば、「テキストの丁寧な読みを通して立ち現われてくる作家像をこよなく大切にするという文学研究の根本姿勢」にあり、それは全執筆者の各論文の精神を貫くものである。まずは、亀井俊介「アメリカ文学史をめぐる」と異孝之「ミシシッピの惑星『野性の棕櫚』の深い時間」に注目する。

何をもって「アメリカ」とするかという根幹の問題に揺らぎながら、それでも「アメリカ」はあると確信する亀井は古典的アメリカ文学史を通観し、現代型アメリカの文学史の出現を喜ぶ。それはメイシー『アメリカ文学の精神』(1913)の「生きた」内容の展開に言及した箇所である。しかしその欠陥も指摘する。歴史的な展望の欠如のため、「時代」や伝記的事実を作品と機械的に結びつけ、テキストとコンテキスト関係を「慎重に考慮した有機的な展望」がえられない。そこで、〈アメリカ像〉を結実させるには、「作品ひとつひとつを精確に読み味わうという基本をきっちり積み重ねていくことがますます必要になっている」と亀井は結ぶ。

亀井の有機的歴史展望を踏まえた作品の読みの好例が異の『野性の棕櫚』論だ。志村正雄の「詩人と映画」がマラルメの言語と映画言語を問題にした、興味深いアメリカ文学の読みをしている一方で、異のトエイン経由のフォークナーと小松左京論も〈アメリカ〉を確かに浮上させている。

『野性の棕櫚』に「人類」のヴィジョンによる二重性を読む異はそこにモンロー・ドクトリンの進展段階と野性との角逐を認め、1927年のミシシッピ大洪水という「アメリカ文明上の一大危機」を読むフォークナーが「本書においてニューオーリンズという結節点をたえず意識しながら、目前の事実を南部の歴史の交錯のうちに二重化された『深い時間』を織り紡ぐ惑星思考を構築した」と判断する。かくて、二重小説の「深い時間」の指摘は南部の時間と全米の時間を架橋するフォークナーと小松文学のパラレル現象へと導かれる。環太平洋的な「深い時間」は「人類」へとむかう両者のモンロー・ドクトリンなる公的想像力を超える文学のあり方を読者に納得させる。

## I アメリカ文学の近代から現代へ

21世紀アメリカのハイパーリアリティの世界から19世紀以降のアメリカ像と文学の行方を辿ってみると、近代から現代の虚実の中に確かな〈アメリカ〉の存在と作家詩人の立場を読むことができる。以下の有益な示唆に富む論考は同時代のポウとメルヴィルがエマソンと対峙し、近代と格闘した様を別の面から照らし出している。

大井浩二「フランシス・トロロブとアメリカ奴隷制度」は、『ジョナサン・ジェファソン・ホイットローの生活と冒険』（1836）においてジュノーのアンチヒーローに対する復讐を語った作家の想像力の強さを力説し、アフリカ系女性の怪物への憎悪を描く筆力がホーソーンの言う「物書きの女ども」の一人ではないことを実証した。では、ホーソーンの筆力は、「報復」のテーマを如何に表現したのであろうか。丹羽隆照「『贖罪』という名の『報復』『ロジャー・マルヴィンの埋葬』再考」はアメリカ社会の父親像に注目し、作品を読み直す、迫力ある論考だ。

ルーベンの行為はなぜ「贖罪」と名づけられたのか。作家の曖昧性の戦略と物語の自伝性・予兆性との間で丹羽は、父親社会アメリカでの「父なし子」たる作家の絶望状況を読み取り、旧家の長男と新興国の文化の担い手たらんとする者との亀裂から作品を「ヤヌスの顔を持つルーベンの『贖罪』の背後には、心のブラックホールに支配翻弄され、自爆的衝動に駆られ続けた修行時代の青年作家ホーソーンの暗い情念が怪物のように蠢いている」と結論づけた。

トロロブの捉えた奴隷制下の怪物やホーソーンの暗い情念の怪物が住む至近距離のアメリカで、オールコットは道徳と性格と小説創造とのかかわりに腐心していた。平石貴樹「ルイーザ・メイ・オールコット アメリカ近代小説序説」はこの経緯を鮮やかに提示する。『若草物語』ではなく、『気まぐれ』（1864）の作者の功績を「ロマンス的なリアリズム小説」創造に認める平石は、ジェイムズの近代リアリズム小説対超越主義的小説の構図を斥け、「苦心の自己表現として書かれた、その意味で個人主義的な、一人前の近代小説」と評価する。そしてその評価をセジュイックとジェイムズの「結婚の失敗というプロット」史に位置づけ、「道徳から性格への進展の中で、性格を道徳によって制御したいと願う自己否定的な自己表現」をめざしたロマンスのシルヴィア像の「時代に先駆けた近代性」を読む平石は、「結婚物語を軸として見たアメリカ近代小説成立史」への広い認知を私たちに促す。

諏訪部浩一「アメリカ現代文学の起源『ワズバーク・オハイオ』再読」は近代的自我のロマンス主義的「錯誤」を問題化し、「格下げされた」〈主人公たち〉の孤独の構造のなかに現代文学の起源を見出す意欲的な論考だ。以後、工業化と都市化が進行するアメリカの都市文学と南部文学の展開を思う時私たちはアンダソンの新しさを切実に感ずる。「偉大な」作品を書くべきモダニズムの時代、諏訪部によれば、アンダソンは「マイナーな」作家として「歴史の——文化史の——必然」を敢行できた。

## II アメリカ現代文学のメジャーとマイナー

工業化と都市化のアメリカ、そのアメリカの虚実がわかりにくくなっていく歴史のなかで、私たちはアンダソンの新しさから発したフォークナーの20世紀文学と21世紀文学のシステム小説の

隆盛の展開を読む。「フォークナー研究の新しい展開」としての三論文は南部大作家への〈成長〉の契機を丁寧に跡づけている。新納卓也「ダーク・マザー 初期フォークナーの『母』たち」は自己の「愛情の円周」内に子供たちを収容する母と反発する芸術家の成長と『響きと怒り』との内的関連を初期作品や「エルマー」と草稿部分「暗黒の女、暗黒の母は（中略）近親相姦を犯しつつ横たわり」などの精密な検討を通して追跡した。ダーク・マザーからコンブソン夫人像を辿った新納は彼女の一生と「南部イデオロギー」の問題性をも指摘することを忘れない。

この問題性は大地真介「『響きと怒り』の技法とテーマ 人種・階級・ジェンダーの境界消失」において手堅く論じられている。大地は、『土にまみれた旗』との比較で作者の技法とテーマ上の成長を『響きと怒り』に認め、「南北戦争敗北により南部で劇的に引き起こされた〈人種・階級・ジェンダーの境界消失〉、すなわち〈貴族階級の白人男性層という旧南部社会の基盤の解体〉」のテーマが「ストーリーの基盤を解体する技法ときっちり連動している」作品の姿を着実に捉えた。

ストーリーの基盤を解体する技法によって、旧南部社会の基盤の解体のテーマが強化されていると大地が指摘したフォークナー世界における基盤／イデオロギーへの作者の変化を田中久男「『エミリーへの薔薇』の歴史と寓意 臨終場面に見えるノーブレス・オブリージ」は一短篇の中に読み、そこにフォークナー成長の軌跡を綿密に辿っている。作品と草稿との間に田中が読み取った、歴史を相対化する作者の成熟はエミリー臨終場面での芸術家としての成長だった。「偶像破壊者に反転した偶像」たるエミリーとトービーの関係におけるノーブレス・オブリージは彼女の墮落と逆行により「したたかに粉碎され」、さらに、黒人使用人が主人の約束を拒むことにより、やはり、「したたかにバロディ化され格下げされ」ることになる。この場面に窺える作品の意義を田中はこう述べる。「旧南部の残照の中で余命を保っていた南部文化の精神を、一度はきっぱり送葬するという作家としてのけじめをつけることによって、社会的、歴史的な広がりの中で南部をいっそう冷徹に相対化する成熟を図った。」

社会的歴史的に南部を相対化し、成長成熟を図るメジャー作家の意気込みはマッカラズには無縁だ。後藤和彦「孤独のインペラティヴ カーソン・マッカラズの文学」は歴史不在の〈私の心〉というマッカラズの「文学的至上主義」の貫徹ぶりを熱く語り、読者の共感を誘う。ミックの「孤独な始動」、アミアアの「孤独の公式」、フランキーの「木塊の感触」という作家の「ごく限られた成長」に後藤は彼女の文学的魅力の秘密を発見している。「あの緑色の狂った夏にそれは起こった。そのときフランキーは十二歳だった」と始まる『結婚式のメンバー』は『心は孤独な狩人』と『哀しい酒場の唄』以来の〈心〉の成長連作の最後の作品と見なされる。

母をもたぬ、永遠の「七度」的な状況でのあの三人の一体感と孤独な狩人との間に揺れる〈心〉はフランキーを常に苦悩へと追いやる。こうしたマッカラズの文学世界を統べる孤独の掟を後藤は「フランキーの愛の対象は、ひとりの人格ではない。また人そのものでさえない。（中略）彼女が愛したのは、人と人のあいだ」と説く。「七度の感覚」を三作で語り続けたマイナー作家の魅力はメジャー作家のそれとは異質なのだ。

### Ⅲ 結びに代えて一名づけえぬものの言語化へ

では、1960年代以降、各時代のアメリカの文学と批評状況のなかで、市場社会の論理に対し、

作家たちはどのようなアメリカを読者に理解させてきたのであろうか。タナー『言語の都市』以来、アメリカで、『重力の虹』(1973)、『ホワイト・ノイズ』(1985)、そして『アンダー・ワールド』(1997)などメガフィクションが書かれてきた。工業化と都市化を推進してきたアメリカの四世紀にアメリカ文学は今後どう対処していくのか。伊藤詔子「汚染の身体とアメリカ 現代女性環境文学を読む」と渡辺克明「敗北の『鬼(イット)』を抱きしめて『アンダーワールド』における名づけのアポリア」二論文はこうした問いに答える。同時に、私たちは、「創作の軌跡 エミリー・ディキンソンの草稿を読む」の稲田勝彦と「大作家と大女優の『愛の形』 ヘミングウェイとディートリッヒ」の今村楯夫と共に、文学の力を考えねばならない。だが、問題をデリーロと女性環境文学が直面した消費主義のアメリカに限ろう。

ベケットの『名づけえぬもの』(1958)以来のアポリアに挑むデリーロはかつてピンチョンがリルケに依拠したように、アンダーワールドの名づけのためブリューゲル絵画と十字架の聖ヨハネの信仰を糧にニューヨークのもつれを解きほぐそうとする。16世紀の画家と神秘詩人の力をもってデリーロは廃棄物の詩学の下、勝者なき冷戦の敗者なることを甘受しつつ、終わることはない挑戦を主人公に課した。システムを支配するものから生を奪回するブリューゲルの『死の勝利』／『子供の遊戯』は、信じるものなきハイパーリアルなアメリカ文明ではつかめぬ〈現実〉の確かな証しを人間に与えるのだ。渡辺の『アンダーワールド』論は作者のヴィジョンを鋭く捉える。主人公ニックは、死に「身を開き、『二十世紀アメリカに取り憑く幽霊』の開かれた名前を『君』とともに再び『路上へ』と誘うのである。」都市の死の問題は環境のそれと呼応する。アメリカの問題に広がるスタイングレイバーたちを論じた伊藤論文から私たちはアメリカ文学の過去と現在の環境を読む態度を知る。そして、生産と消費をめぐるアメリカ文明と文化についてさまざまな示唆をえることができた。

以上、本書は文学研究のあり方に反省を促すものであった。本書の意義を確認すべく、最後に、粗略ながら、アメリカの〈近代〉と〈現代〉を辿ってみよう。ブラウンやボウのグロテスクからデリーロの名づけえぬものに至るまで、アメリカの言語化は都市の変容と共に変容を被ってきた。古典的怪物からサイボーグに至るグロテスクの変容のなかで都市は語ることを止めない。ピンチョンのロケット都市の前代未聞たる「キーンという音」、デリーロの給水塔のニューヨークを偲ぶ「それは屋上の夏だった」、マッカーズの心に起こった「あの緑色の狂った夏」など、生を語る都市の言語は尽きることはない。象徴の都市から寓意の都市への変貌に抗う歴史がアメリカ文学史であるのかもしれない。『都市への権利』(1968)のルフェーヴル以来、都市は「内破一外破」を内に秘め、21世紀に至っている。「都市が内包する貨幣経済と交通・通信メディアによって、それまで都市の存在を特徴づけてきた場所性が内的に無効化されつつあると同時に、それによって都市がそれまでの都市の『境界』を超えて、外的にも巨大化しつつある」と「内破一外破」を若林幹夫(1999)が解説しているが、その都市像と消費のイデオロギーを踏まえ、アメリカと流瀆のアメリカ文学に接していくことも必要になっているのではなかろうか。

工業化＝都市化の帰結たる終末的都市の外破・内破的狀況は抽象化希薄化の文化にあって文明に抗する文学の相手であった。スタグフレーションとマクドナルドのアメリカでは資本支配の意志が土地と人間との互恵関係の歴史を損い、歴史の重みを排除してきた。「マクドナルド化」を佐伯啓思(2003)は「文脈依存的な」文化と「脱文脈的な」文明との対決にその意味を認め、グロー

バル化の根源を見出している。「仕上げるのに長い時間がかからぬ」ものはないとマッカーズが弁じ、グリッサンが『墓地への侵入者』の黒人ルーカスの〈内面〉を訴え、コンフィアンがアナーヤ同様、プランテーションにおける〈不運〉と〈歴史〉を語るのもすべて文明に対する文化側の発言だった。文学研究にこうした文脈を辿る努力が要請される今日、本書所収の15論文のアメリカの文脈に沿った読みに私たちは応えていかねばならないだろう。この点こそ、近代を終らせる現代での〈ニューフロンティア〉としての本研究書が評価されるべきだと思う。

\* 会誌第46号で書評を担当された大島由起子先生から、書評の一部を訂正したいとお申し出を受けました。ここに転載します。対象箇所は、43頁の22-24行に亘る部分です。

(編集責任者)

誤：「大宮健史著「マーク・トゥエインのユーモアと作品の原点、初期のスケッチ群」は、「ジム・スマイリーと跳び蛙」のユーモアが『苦難を忍んで』、『トム・ソーヤーの冒険』の源になったことを検証し、」

正：「大宮健史著「マーク・トゥエインのユーモアと作品の原点、初期のスケッチ群」は、初期のスケッチ群が「ジム・スマイリーと跳び蛙」、『苦難を忍んで』、『トム・ソーヤーの冒険』の源になったことを検証し、」

## 編 集 後 記

『中・四国アメリカ文学研究』（第47号）をお届けします。今回は8名の論文投稿希望者があり、編集委員会として最終的に受理した論文は3篇でした。厳正な審査の結果、2篇の採用となりました。今号の執筆者の氏名と所属機関は以下のとおりです。

赤 山 幸太郎（高知工業高等専門学校）  
島 克 也（広島大学（非常勤））  
伊 藤 詔 子（松山大学）  
辻 和 彦（近畿大学）  
小 森 健太郎（作家、近畿大学）  
元 山 千 歳（京都外国語大学）  
林 康 次（愛媛大学）  
藤 江 啓 子（愛媛大学）  
本 荘 忠 大（旭川工業高等専門学校）

英文校閲は Ian Willey 氏（香川大学）に依頼しました。今年度の編集委員は次のとおりです。

横 田 由 理（広島国際学院大学）  
藤 吉 清次郎（高知大学）  
的 場 いづみ（広島大学）  
松 島 欣 哉（香川大学）

次号は2012年6月に発行の予定です。会員の皆様からの多数のご投稿をお願いします。投稿希望のご連絡は、e-mailでも受け付けます。編集責任者（[fujiyoshi@kochi-u.ac.jp](mailto:fujiyoshi@kochi-u.ac.jp)）または事務局までご連絡下さい。また、過去一年間に会員が関わって出版された研究書等のなかで、優れたものの「書評」を掲載しますので、事務局と編集責任者までご献本をお願いします。

44号以降の会誌の内容はすべてPDF化し、ホーム・ページで公開しています。43号までの会誌については、目次のみ公開しています。ご活用下さい。

会員が所属される機関等で、会誌に掲載された論文等を公開される場合（個人のホーム・ページを含む）は、必ず、PDF化した会誌あるいは抜き刷りの紙面を用い、当該論文等が掲載された会誌の号数を明示して下さい。公開に際して、事務局へのご連絡は不要です。なお、著作権は、執筆者本人と中・四国アメリカ文学会に帰属するものとします。

(M.K.)



#### 投稿規程

1. 資格：過去1年以上、本学会会員であること。
2. 内容：アメリカ文学全般に関する、未公刊の研究論文。
3. 制限：投稿原稿は、完成原稿とし、一人につき1篇とする。
4. 体裁：
  - 1) 執筆に際してはワープロ・ソフトを使用し、和文・英文とも、仕上がりページの書式（A4判で、1ページ43字×38行、文字のポイントは11）に設定すること。
  - 2) 和文の場合は、注および引用文献を含む9枚以内の本体（ただし、9枚目は5行分の余白を残すこと）に、英文のシノプシス1枚を付すこと。
  - 3) 英文の場合は、注および引用文献を含み11枚以内。英文のシノプシスは不要。
  - 4) 和文の場合は、外国語の固有名詞（人名・地名）および作品名は日本語で示し、初出の箇所のでその原綴りを丸括弧内に表記すること。ただし、よく知られている場合は省略してよい。
  - 5) 本文中の引用の仕方、注および引用文献の表記の仕方、英文原稿（英文シノプシスを含む）のスタイル等に関しては、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*または『MLA英語論文の手引き』（北星堂）の最新版に従うこと（Works Cited方式とする）。
  - 6) 投稿論文には、氏名、謝辞、口頭発表の仔細などは記載せず、表題のみを記すこと。
  - 7) 投稿論文には、通し番号を付すこと。
5. 提出：
  - 1) 打ち出し原稿2部を編集責任者の許へ送付すると共に、MSワードで作成した添付ファイルをメールで送ること。
  - 2) 中・四国アメリカ文学会のホームページにある「投稿チェックシート」をダウンロードし、必要事項を書き込み、打ち出し原稿と共に編集責任者の許へ送付すること。
6. 締切：
  - 1) 投稿希望の場合は、毎年10月末日までに、(1)論文の表題、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所・電話番号・メールアドレスを、葉書あるいはメールで編集責任者または事務局へ連絡すること。
  - 2) 投稿の締切は、毎年1月10日とする。期限厳守。
7. 宛先：〒780-8520 高知市曙町2丁目-1 高知大学人文学部 藤吉清次郎
8. その他：投稿原稿は返却しない。採用決定後、修正原稿を添付ファイルとして編集責任者へメールで送ること。なお、執筆者は初校終了時に、分担金として1篇につき2万円を、郵便振替口座(01380-0-22492（最後の番号は右詰）)に振り込むこととする。

「シンポジウム報告」および「書評」の執筆要領は、ホーム・ページをご覧ください

ISSN 0388-0176

中・四国アメリカ文学研究 第47号

---

2011年6月1日 発行

編集兼発行者 中・四国アメリカ文学会  
発行責任者 加藤好文  
編集責任者 松島欣哉  
事務局 山口大学教育学部 藤本研究室  
〒753-8513 山口市吉田1677-1  
Tel : 083-933-5344  
e-mail : fjntyknb@yamaguchi-u.ac.jp  
URL : <http://www.chushi-als.org>  
印 刷 株式会社 美巧社  
〒760-0063 高松市多賀町1-8-10  
Tel(087)833-5811 Fax(087)835-7570

---

*Chu-Shikoku Studies in American Literature, No.47*

Edited, published, and distributed by

The Chu-Shikoku American Literature Society

Executive Office : Faculty of Education (c/o Assoc. Prof. Fujimoto)

Yamaguchi University, 1677-1, Yoshida,

Yamaguchi, Yamaguchi 753-8513 Japan

Tel : 083-933-5344

e-mail : fjntyknb@yamaguchi-u.ac.jp

URL : <http://www.chushi-als.org>

*Chu-Shikoku*  
*Studies in American Literature*

No. 47

June 2011

The Chu-Shikoku American Literature Society